大屋敷遺跡Ⅵ

宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

大屋敷遺跡Ⅵ

宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

1．大屋敷遺跡Ⅵ 全景

2．大屋敷遺跡Ⅵ 出土遺物

序

前橋市は、北に赤城山、西に榛名山、南西に妙義山の上毛三山がそびえ、その赤城山と榛名山の裾野の間を南北に利根川が流れる水と緑にあふれた地であります。

前橋は古代よりの豊かな文化あふれる地であり、東国の奈良と称されています。今から２万８千年前の旧石器を始めとして、10基を数える国指定の古墳、関東の華とうたわれた前橋城、明治からの近代化を示す昭和庁舎等の近代化遺産など多くの文化財が残されています。

自然環境に恵まれたこの地では、古代からの人々の生活の跡が市内のほぼ全域に残されています。古代の人々の暮らした家の跡、使った石器や土器などの道具や、水田跡なども多く、毎年の埋蔵文化財発掘調査により多くの新しい発見があります。

総社町の大屋敷地区は周辺に総社古墳群や山王廃寺があり、過去５次にわたる調査でも多くの住居跡ほか特殊な遺物を多く検出し、遺跡の重要性が注目を浴びています。

本年度調査の大屋敷遺跡Ⅵでは、暑さと降水、重複錯綜する住居跡に悩まされつつ、古墳時代からの住居跡等を調査いたし地域の歴史解明に貴重な資料を得ることができました。

発掘調査にあたりまして、ご協力をいただきました市管財課、地元関係者、酷暑のなか調査に従事されました皆様に感謝とお礼を申し上げます。

平成13年３月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団　長　**阿　部　明　雄**

例　　言

1．本報告書は、前橋市宅地造成事業に伴う大屋敷遺跡VI発掘調査報告書である。

2．遺跡は群馬県前橋市総社町４丁目13番地に所在する。

3．調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団　団長　阿部明雄が、前橋市長　萩　原　弥惣治と委託契約を締結し実施した。

調査担当および調査期間は以下の通りである。

発掘・整理担当者　鈴木雅浩・髙橋一彦（前橋市埋蔵文化財発掘調査団発掘調査係）

発掘調査期間　平成12年４月24日～平成12年６月23日

整理・報告書作成期間　平成12年12月１日～平成13年３月23日

4．本書の原稿執筆・編集には、鈴木・高橋が行った。なお、「VI. 大屋敷遺跡の総括」の原稿執筆については井上唯雄が行った。

5．整理作業をはじめ、図版作成には、石原義夫・岩木　操・岸フクエ・渡木秋子・中澤光江・平林しのぶ・湯浅たま江・湯浅道子の協力があった。

6．発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

凡　　例

1．挿図中に使用した北は座標北である。

2．挿図に建設省国土地理院発行の1/20万地形図（長野・宇都宮）と1/2.5万地形図（前橋）を使用した。

3．本遺跡の略称は12A100である。

4．各遺構および遺構施設の略称は次のとおりである。

H…古墳・奈良・平安時代の住居址　D…土坑　W…溝　P…柱穴

B…掘立柱建物址

5．遺構・遺物の実測図の縮尺は次のとおりである。

遺構　住居址…1/60　竈断面図…1/30　溝…1/40・1/60　土坑…1/60

掘立柱建物址…1/60　全体図…1/400

遺物　土器…1/3・1/4　石製模造品…2/3　臼玉　鉄器…1/3・2/3

石器・石製品…1/3・2/3

6．スクリーントーンの使用は次のとおりである。

遺構平面図　焼土…点　灰…斑　遺構断面図　構築面…斜線

遺物実測図　須恵器断面…黒塗　炭化物（スス付着）…斑

灰釉陶器断面…濃点　灰釉陶器内面…あられ

── 目　　次 ──

序……i

I　調査に至る経緯……1

II　遺跡の位置と環境

1　遺跡の立地……1

2　歴史的環境……1

III　調査の経過

1　調査方針……5

2　調査経過……6

IV　層　　序……7

V　遺構と遺物

1　住 居 址……8

2　掘立柱建物址……16

3　溝……17

4　土　　坑……17

VI　大屋敷遺跡についての総括……21

図　版

口絵　1　大屋敷遺跡VI全景
2　大屋敷遺跡VI出土遺物

PL. 1　調査区全景
2　H—292号住居址、W—15号溝
3　H—294～296号住居址
4　H—297・299～301号住居址
調査区南側全景
5　H—298・302・303・305～307・310号住居址、D—173～175号土坑
6　H—298・306・307・310号住居址
7　H—292・306・311～313号住居址、B—2号掘立柱建物址、W—17号溝
8　H—292・294・296号出土の土器
9　H—296・298～301・305・306・310～312、D—176号出土の土器
10　臼玉・管玉・剣形品・石鏃・叩石・鉄器

挿　図

Fig.　頁
1　大屋敷遺跡の位置……v
2　位置図と周辺遺跡図……2
3　大屋敷遺跡周辺図……4
4　グリッド設定図……5
5　大屋敷遺跡標準土層図……7
6　大屋敷遺跡調査全図……23
7　遺跡・遺構全体図……24
8　H-292・293・295号住居址 ……25
9　H-294・308号住居址 ……26
10　H-296・297号住居址 ……27
11　H-299・302・313号住居址……28
12　H-298・303・306号住居址……29
13　H-300・301号住居址、B-2号掘立柱建物址 ……30
14　H-304・305・312号住居址……31
15　H-307・310・311号住居址……32
16　W-15～17号溝、D-172～177号土坑……33
17　H-292号住居址出土の土器……34
18　H-294・296～306号住居址出土の土器……35
19　H-306・307・310～313号住居址、D-176号土坑出土の土器……36
20　H-292・294・297・300・310号住居址、W-16・17号溝、グリッド出土の土器・石製品・縄文・鉄製品……37

表

Tab.　頁
1　大屋敷遺跡VI土器観察表……19
2　石器・石製品観察表……20
3　縄文式土器観察表……20
4　鉄器観察表……20

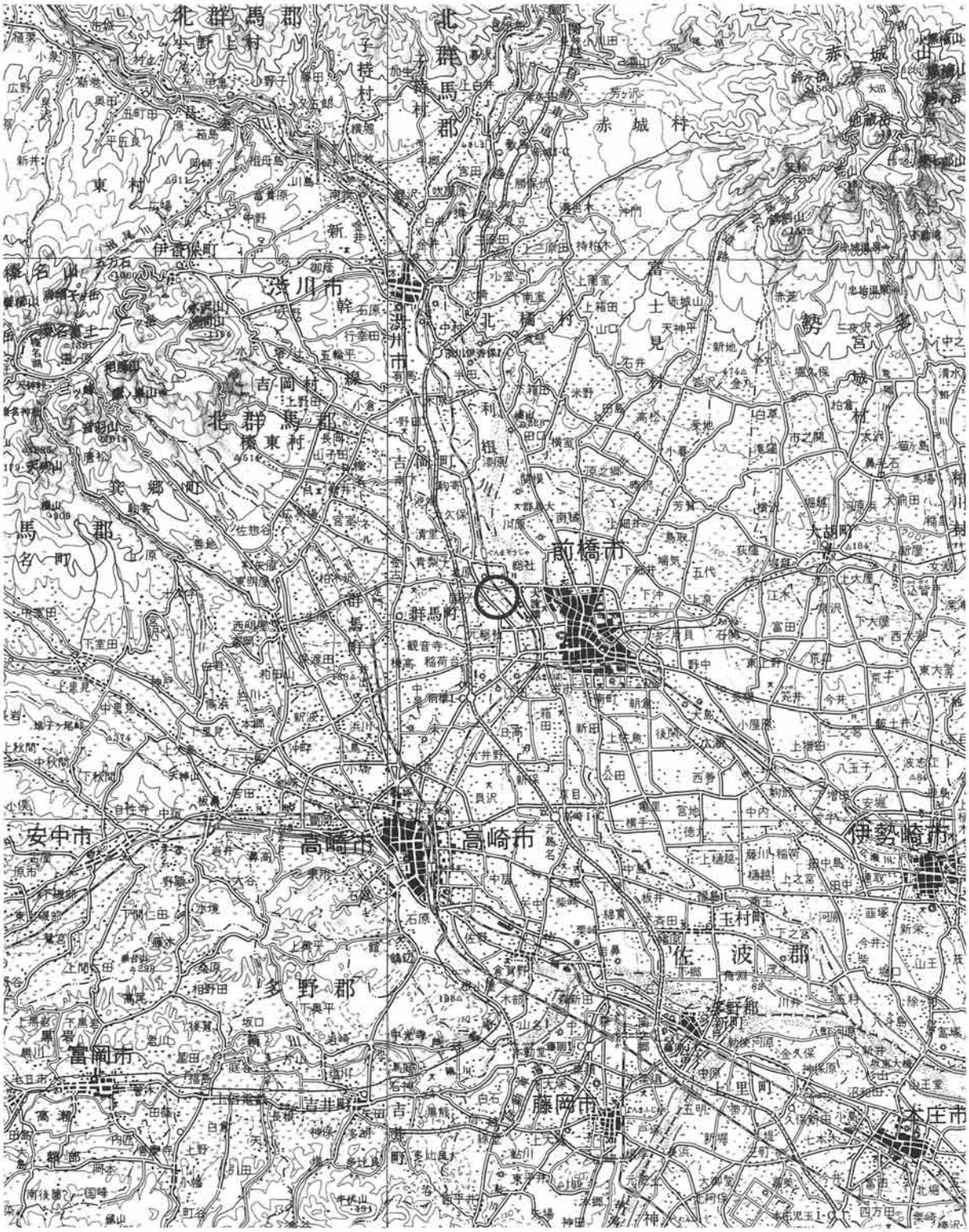


Fig. 1　大屋敷遺跡の位置

I　調査に至る経緯

本発掘調査は、平成４年より埋蔵文化財記録保存のための発掘調査を実施することが前橋市都市計画課との間で確認され、大屋敷地区の土地区画整理事業を目的とした前橋市大屋敷地区土地区画整理組合（代表者　大山栄一）の正式発足に伴い組合と前橋市埋蔵文化財発掘調査団との間で５年間にわたる発掘調査に関する覚書を締結し、それに基づき平成８年まで５カ年継続的に調査が実施された。その後、しばらく時間が空いたが、平成12年１月６日付けで前橋市長　萩原弥惣治（前橋市総務部管財課）より宅地造成事業に伴う調査依頼があり、同教育委員会が組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長　阿部明雄）はこれを受諾し、同年４月13日両者の間で本発掘調査の委託契約を締結、４月24日、現地での発掘調査を開始するに至った。今年度の調査区は東西幅が６ｍ、南北の長さが90ｍの道路部分で、調査面積は536㎡である。なお、こうした経緯を踏まえ本遺跡を「大屋敷遺跡VI」と命名し埋蔵文化財発掘調査を実施した。

II　遺跡の位置と環境

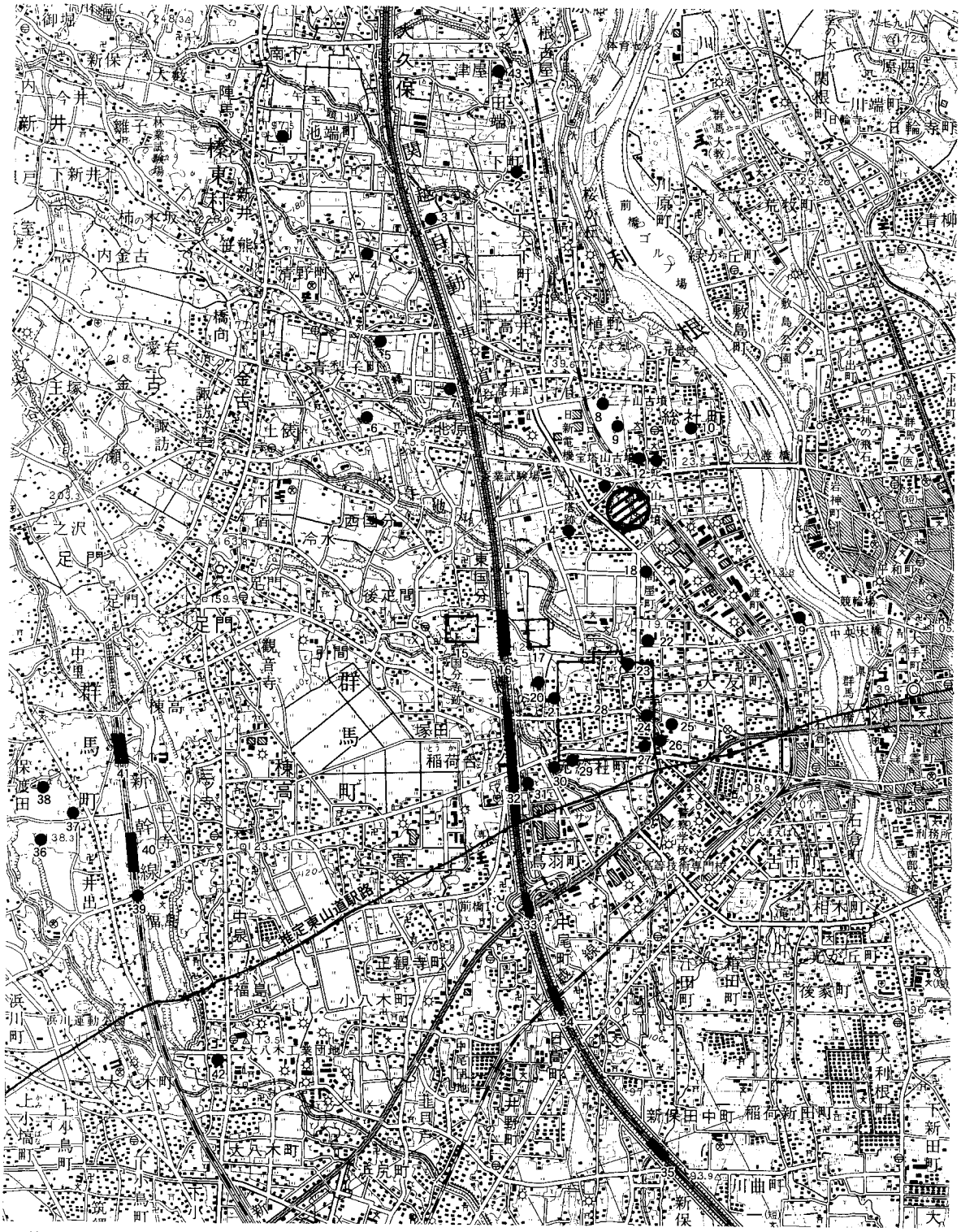
１．遺跡の立地

大屋敷遺跡は前橋市街地（県庁付近）から利根川を隔てて、北西約３㎞の地点に所在する。遺跡地の地番は前橋市総社町４丁目13番地である。遺跡地の周囲は主要幹線道が縦横に走っている。北側100ｍ付近には前橋・箕郷線が東西に走り、西側は市道大友西通線（通称、産業道路）が、また300ｍ程東にはJR上越線が南北に走っている。そして、これらの主要幹線に沿って市街化が進み、工場や住宅街が遺跡地を取り囲むように立ち並んでいる。遺跡地の立地は榛名山東南麓に広がる相馬ケ原扇状地の扇頂部より下流する河川群のひとつ、八幡川左岸域の標高約123ｍの微高地上にある。位置的にはほぼ、相馬ケ原扇状地面と前橋台地面の境界付近を占地する。

遺跡地の南側には榛東村に源を発する八幡川が南東方向に流れ、東側には江戸時代初期、総社藩主秋元長朝により開削された天狗岩用水がわずかな流量ながら南流し、両者は遺跡地の南東脇で合流し滝川と名前を変えた後、利根川と平行する形でさらに流下して行く。遺跡地の両川と接する部分は比高５～６ｍほどの段丘崖を呈し、遺跡地を含む段丘上は高燥化した台地が広がり、主に畑作地として利用されている。

２．歴史的環境

過年度の調査によって、検出された主な遺構は古墳時代から中世にかけてであるが、調査区の出土遺物のなかには縄文時代中期、加曽利Ｅ式の土器片も若干検出されているので、ここでは本



1．清里・陣場遺跡群　2．中島遺跡　3．長久保遺跡　4．清里・庚申塚遺跡　5．清里南部遺跡群　6．熊野谷遺跡　7．下東西遺跡　8．総社二子山古墳　9．愛宕山古墳　10．遠見山古墳　11．蛇穴山古墳　12．宝塔山古墳　13．村東遺跡　14．山王廃寺跡　15．上野国分僧寺跡　16．国分僧寺・尼寺中間地域遺跡　17．上野国分尼寺跡　18．産業道路西遺跡　19．王山古墳　20．小見遺跡　21．草作遺跡　22．関泉樋遺跡　23．関泉明神北遺跡　24．寺田遺跡　25．大友屋敷Ⅱ・Ⅲ遺跡　26．元総社明神遺跡Ⅴ　27．元総社小学校校庭遺跡　28．推定上野国府　29．天神遺跡　30．染谷川遺跡　31．弥勒山遺跡　32．鳥羽遺跡　33．中尾遺跡　34．日高遺跡　35．新保遺跡　36．二子山遺跡　37．八幡塚遺跡　38．薬師塚遺跡　39．三ッ寺Ⅰ遺跡　40．三ッ寺Ⅱ遺跡　41．三ッ寺Ⅲ遺跡　42．雨壺遺跡　43．三津屋古墳

Fig. 2　大屋敷遺跡Ⅵの位置と周辺の遺跡

遺跡地周辺の歴史的環境を縄文時代から順に概観してみたい。

縄文時代の代表的な遺跡としては国分僧寺・尼寺中間地域遺跡（16）、産業道路西遺跡（18）があげられ、縄文中期・後期の遺構が集落的な規模で検出され、当該地域の縄文文化を考えるうえで重要な資料となった。また熊野谷遺跡（６）からは中期加曽利Ｅ式土器を伴う住居址群のほか、遺物では早期の押型文土器や沈線文土器が検出され、当地域における初源事例を更新した。そのほかの遺跡としては、下東西遺跡（７）、清里南部遺跡群（５）、清里・陣場遺跡群（１）、中島遺跡（２）、長久保遺跡（３）、雨壺遺跡（42）などがあげられ、時期的には前期から後期初頭といった範囲でおさえられる。

弥生時代の周辺遺跡は、集落・住居主体の遺跡と水田址関係の遺跡とに大別され、前者は八幡川、牛池川、染谷川流域などの高燥化した台地上に立地し、後者は、さらに下った平野部の後背湿地上に集中している。弥生時代中期後半の環濠集落である清里・庚申塚遺跡（４）、後期の住居が検出された国分僧寺・尼寺中間地域遺跡などは前者であり、日高遺跡（34）、新保遺跡（35）に代表されるAs－Ｃ軽石（浅間山起源：４世紀中頃）下の水田址などは後者である。

古墳時代を彩る一大モニュメントとしての古墳が本遺跡地周辺に姿を現すのは、５世紀末頃と推定される。まず、主軸70mを測る遠見山古墳（10）が築かれ、次いで６世紀前半代には、利根川右岸段丘上に、川原石を用いた積石塚である王山古墳（19）が造られる。
その後、本遺跡の北約２kmには、国指定史跡で前方部と後円部に石室を有する総社二子山古墳（８）、巨石使用の横穴式石室をもつ愛宕山古墳（９）、さらに県内最終末期と考えられ仏教文化の影響を強く受けた宝塔山古墳（12）と蛇穴山古墳（11）など、総社古墳群を構成する数々の古墳が連綿と築かれていく。宝塔山古墳の南西約500mに所在する山王廃寺跡(14)にみる石造物群は、宝塔山古墳石棺や蛇穴山古墳石室と同系統の石造技術を駆使して加工されたと考えられている。共通する技法から時代決定の根拠とされ、白鳳期の建立と考えられる山王廃寺を中心にして、総社・元総社周辺では、仏教文化が古墳文化と併存しながら花開いた様子が窺える。

奈良・平安時代になると、推定国府（28）、国分僧寺（15）、国分尼寺（17）等の建設とあいまって、当地域はいよいよ古代上野の政治的・文化的中心地としての様相を帯びてくる。国府周辺遺跡では、閑泉樋遺跡（22）、閑泉明神北遺跡（23）、小見遺跡（20）、草作遺跡（21）、大友屋敷遺跡(25)、寺田遺跡（24）、元総社小学校校庭遺跡（27）、天神遺跡（29）、染谷川遺跡（30）、弥勒山遺跡（31）等がある。また国分僧寺の発掘調査は昭和55年12月から始まり、それ以降毎年発掘調査が進められ、各種遺構の基壇、礎石、堀などが確認されてきた。国分僧寺、国分尼寺周辺では、関越自動車道建設に伴う発掘調査が進められ、筋道にあたる中尾遺跡（33）、鳥羽遺跡（32）、国分僧寺・国分尼寺中間地域（16）等が発見されている。これらの遺跡からは、奈良・平安時代の住居址等が大量に検出されている。このことからも、奈良時代から平安時代にかけて、当地では急激に集落の拡大した様子が窺われる。

その後、中世には長尾氏により、国府の堀割を利用したと考えられる蒼海城が築かれる。

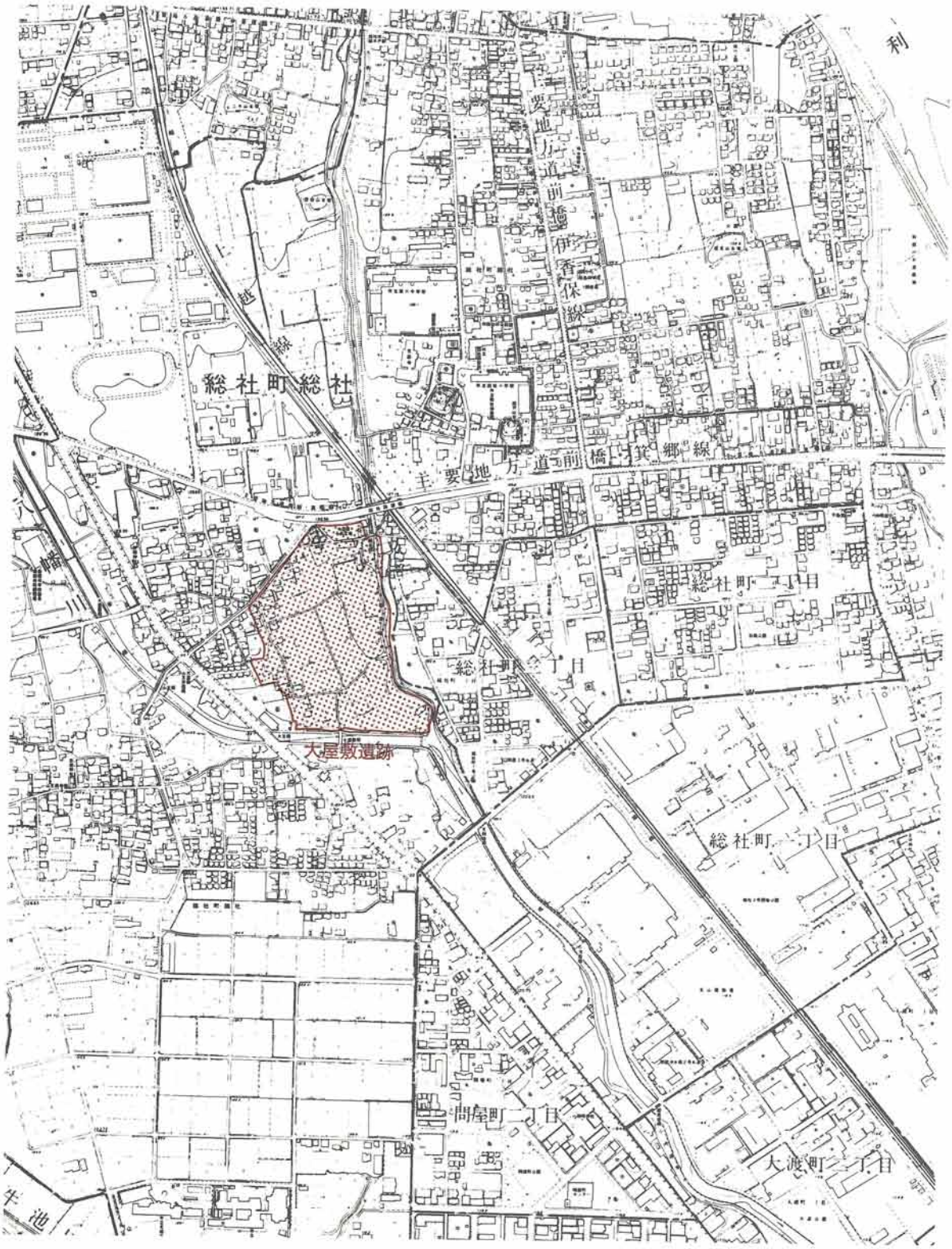


Fig. 3　大屋敷遺跡周辺図

Ⅲ　調査の経過

1．調査方針

委託された調査箇所は東西幅が６ｍ、南北の長さが90ｍの道路部分で、調査面積は536㎡である。調査実施に際しては、まず過去５年間の発掘調査範囲の全域をカバーする４ｍグリッドを想定し、このグリッドを最小単位とした。各グリッドの呼称方法は南北方向をＹ軸とし、北から南へＹ１，Ｙ２，Ｙ３，……、東西方向をＸ軸として西から東へＸ１，Ｘ２，Ｘ３，……で表しそれぞれ北西の交点をグリッド名とした。その他、調査実施段階での方針は以下のとおりである。

１．土層観察は原則として遺構中央部で交差するセクションベルトを設けて行う。

２．10cm四方以上の遺物は縮尺１/20にて図化し、それ以下についてはドット標記した平面図を作成し、取り上げに際しては遺物台帳に所属性を記録する。

３．竈は原則として１/10で図化し、遺構平面図は原則として縮尺１/20にて実施する。

なお、今年度の測量の基準点は、Ｘ59・Ｙ65グリッドである。この地点の公共座標は第Ⅸ系（Ｘ＝＋44680.000m，Ｙ=－71124.000m）である。

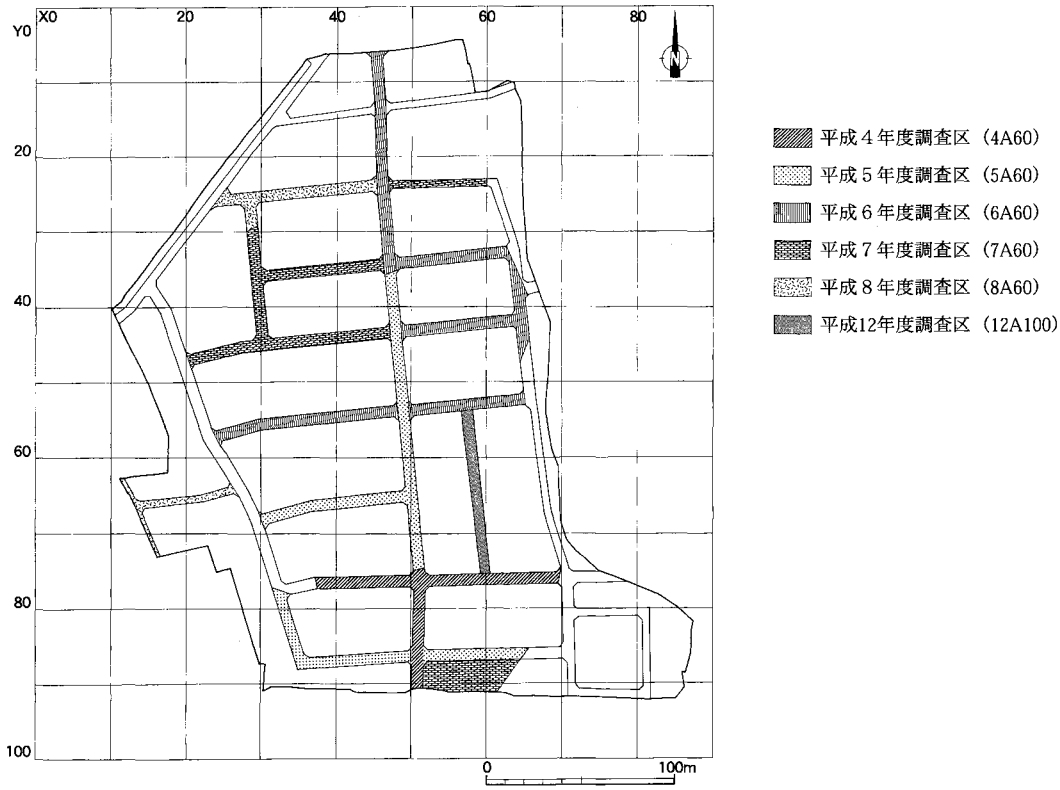


Fig. 4　グリッド設定図

2．調査経過

本遺跡は、平成４年から平成８年までの５カ年継続的に調査が実施されており、時間が空いたが、今年度で第６次の調査となった。

４月初旬に打ち合わせを済ませ、４月13日、依頼主である管財課と委託契約締結後、各種事務手続きを終了し、事務所に器材を搬入し点検を行った。現場事務所は電気、水道の関係から以前の調査で使用していた場所に設置した。

現地での調査は24日より調査区南側から２日間かけて表土を除去（標準土層：II層）し、遺構確認を行った。粘性の強い黒褐色土層主体の地層構成のため、遺構検出が極めて困難で、また、遺構のほとんどが重複をしており確認は難航を極めた。

さらに、調査にはいると本地域特有のこの土層は、時間の経過と共に移植ゴテを受けつけなくなるほど固く締まり、掘り下げる遺構に多量の散水を行い、調査をするのが日課になった。また途中、思わぬ大雨で遺構が水没してしまう場面もあった。

調査は南側より遺構を掘り下げ、精査を行った。今年度も臼玉や管玉、剣形品などの特殊遺物が出土し、過年度調査との関連において本地域の性格を知る上で貴重な資料となった。

また、調査が進み特に古墳時代の住居址がさらに深い層（標準土層：III、IV層）を切り込んでおり、さらに掘削の実施が必要となり、５月30日付けで委託変更契約の締結を行い引き続き調査を行った。

その結果、中央より南側部分においては現地表面より平均１～２m程で住居址21軒、溝址２条、土坑６基を検出した。ほとんどの住居址が複雑に重複しており、短期間の立て替えしも考えられ、住居範囲を確定するのに苦労した。その中で当初、H－306号住居址の床一面に粘土状のブロックが検出され、その後の調査で「中筋型屋根」に似た土屋根であることが判明し、この地にも季節により生活する場を住み分けていたことが実証できた。しかし、残念なことに調査区の中央より北側は大きな攪乱を受けており、遺構の残存状況が非常に悪く、総社砂層 As―sj（標準土層：IV層）を切り込んだ掘立柱建物址１軒と上部が削平された住居址１軒を検出できたのみであった。今までの調査を鑑みると、こうした攪乱がなければ、北側にも多くの遺構が存在していたと思われる。

このように、複雑にからみ合った遺構群により、当初の予定よりも若干時間が多くかかったが、調査は６月23日にすべての遺構の精査を終え、高所作業車による写真撮影及び遺跡全体測量を実施し、委託者および近隣の住民へ終了の挨拶を済ませ現地発掘調査を終了した。その後の整理作業は、12月１日から翌年３月まで文化財保護課整理棟で行い、すべての作業を完成させる運びとなった。

Ⅳ 層　　序

「大屋敷遺跡Ⅰ」で設定した深堀から観察される地層は基本的には、大きく２つに分類できる。上位の厚さ１ｍほどの黒褐色土層と下位に堆積するラミナ（縞目）状の固くしまった砂とシルトの互層である。この灰褐色系統の砂層は総社、元総社付近を中心に利根川右岸一帯に広がっており、層厚は元総社地内の遺跡地（『元総社明神遺跡Ｘ』1991年）で約２～４ｍを測り、本遺跡のように５ｍを越える（天狗岩用水に接する段丘崖）ところもある。

本報告書はこの砂層を「総社砂層」と呼ぶことにする。この砂層 As－Sj（浅間一総社軽石；約1.1万年前）を含む前橋泥炭層の上にあることからその堆積は約１万年前以降から始まったと推測されるが、正確な堆積年代は今のところ明らかにされていない。ただ過年度調査において、縄文中期の加曽利Ｅ式土器が検出されたことや周辺遺跡の縄文土器出土状況（縄文中期に集中）から推測すれば、堆積期間は縄文時代前期（約6000年前）のころまでは続いていたと思われる。また総社砂層の上に乗る黒褐色土層は硬く、極めて粘性が強い。

本年度調査区においては、南側半分は、ほぼ下記の標準土層どおりであった。しかし、北側半分は産業廃棄物等による攪乱によりⅠ～Ⅱ層が削られており、部分的にⅢ～総社砂層にまで攪乱が及んでいる場所もあった。

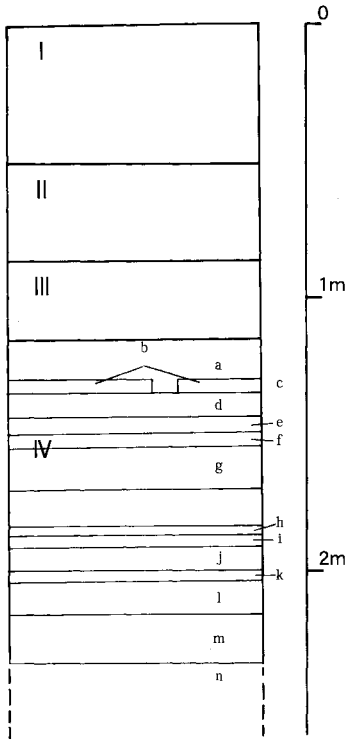


Fig. 5　大屋敷遺跡標準土層図

Ⅰ　層：暗褐色粗砂層　耕作土。As－B（浅間Ｂテフラ；1108年）を若干含む。

Ⅱ　層：極暗褐色粗砂層　二次堆積の As－C（浅間Ｃテフラ；４世紀中頃）10%、および Hr－FP（榛名二ッ岳軽石；６世中葉）を若干含む。

Ⅲ　層：黒褐色細砂層　二次堆積の As－C（浅間Ｃテフラ；４世紀中頃）20%、および Hr－FP（榛名二ッ岳軽石；６世紀中葉）10%若干含む。

Ⅳ　層：総社砂層　砂、シルトの互層。

ａ…黄褐色シルト層　ｂ…褐色シルト層
ｃ…浅黄色シルト層　ｄ…にぶい黄褐色微砂層
ｅ…にぶい黄橙色シルト層　ｆ…褐色細砂層
ｇ…灰黄褐色粗砂層　ｈ…にぶい黄色シルト層
ｉ…にぶい黄褐色微砂層　ｊ…灰黄褐色粗砂層
ｋ…にぶい黄褐色微砂層　ｌ…灰黄褐色細砂層
ｍ…にぶい黄褐色細砂層　ｎ…灰黄褐色粗砂層

V　遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居址22軒、掘立柱建物址１軒、溝３条、土坑６基である。住居址22軒は東側に竈を有する住居址が21軒、南に竈を有する住居址が１軒であった。時代については古墳時代から平安時代の住居址で、縄文時代中期の土器片も数点出土したが、住居址等の遺構は確認されなかった。

中でも特筆すべき遺構としては、H―306号住居址がある。本住居址は「土屋根」の崩落と思われる粘土状のブロックが床面において散乱し、それが焼失により土器の塊のようになって検出された。

これは、渋川市の「中筋遺跡」で報告されているもので、「中筋型屋根」とよばれる竪穴式住居に類似している。その構築課程は①縦穴式住居の選定、縦穴を掘り始める。②竪穴式住居を堀り上げる。深さ70cm位。（土は竪穴の際に盛り上げないで周辺に仮置きする。）③地表面で屋根をつくる。A、垂木は竪穴の壁から40cm位外に出す。B、屋根組（垂木、横木）の上に茅材を縦横に交互に薄く敷く。これは屋根の下地に相当する。④仮置きしていた土を屋根の垂木尻を固定させるために土を土塁状に寄せる。これが周堤帯である。屋根の下地の上に土を乗せる。⑤土を10cm位の厚さに均等に乗せる。さらに、土屋根の上にはもう１枚草葺きが施される。

残念ながら、この住居址もH―298号、H―307号住居址との重複関係や、遺構の残存状態の不良により住居跡が崩壊していく過程を完全に復元するにはいたらなかったが、この地にもこうした屋根構造の住居が存在していた事実は実証できた。

また出土遺物に関しては、杯、甕、椀類の他、H―292号住居址から臼玉や管玉、H―294号住居址より臼玉や石鏃、H―298号住居址から留金具、H―300号住居址から臼玉や刀子、H―302号住居址より剣形品が出土している。

なお、遺構番号は「大屋敷遺跡Ⅴ」までの続き番号を使用している。

1　住居址

H―292号住居址（Fig. 8　PL. 2）

◎位置　X59～60，Y73～74　　◎面積　(10.49) m²　◎方位　N―168°―E

◎形状　長径3.74m　短径（3.38）m　住居址の東側が調査区外へ延びるため、東側一部分は検出できず。確認できた範囲で、ほぼ方形を呈すると思われる。掘り込みは41cmで、立ち上がり角度は67°である。

◎床面　平坦で部分的に堅緻な面を確認したが、踏み固められたものではない。柱穴は検出されなかった。また、遺構中央部で焼土範囲と粘土の広がりを確認したが、炉址と断定する

には至らなかった。

◎重複　H－311号住居址と重複しており、本遺構のほうが新しい。

◎遺物　土師器片1307点、須恵器片17点、臼玉２点、管玉２点、磁器１点の総数は1329点が出土。このうち、土師坏11点、土師甑１点、土師甕１点、土師小甕１点、臼玉２点、管玉２点を図示した。

◎備考　覆土や出土遺物から本住居址は６世紀前半の時期と考えられる。

H－293号住居址（Fig. 8　PL. 1）

◎位置　X59，Y74～75　◎面積　(0.41) ㎡　◎方位　N－80°－E

◎形状　調査区内の西壁で、竈のみの検出。

◎ 竈　東壁に位置すると思われる。確認できた範囲で、焚口部幅(45)cm，奥行き(88)cmを測る。

◎遺物　土師器片４点で、図示できたものはなかった。

◎備考　竈のみの検出のため、時期は不明。

H－294号住居址（Fig. 9　PL. 3）

◎位置　X58～59，Y72～73　◎面積　(14.03) ㎡　◎方位　N－83°－E

◎形状　長径4.32m　短径（3.53）m　西側一部分は調査区外であるが、現存値から方形を呈すると思われる。掘り込みは31cmで、立ち上がり角度は75°である。

◎床面　極暗褐色土層（II層）を掘り込み床面を構成している。全体に平坦な床面であり、特に竈周辺を中心に部分的に堅緻な面が残っている。

◎ 竈　東壁中央部よりやや南寄りに設置されている。焚口部幅36cm，奥行き92cmを測る。

◎ピット　４基検出。　P_1　長径23cm×短径20cm×深さ23cm

P_2　長径27cm×短径24cm×深さ21cm

P_3　長径27cm×短径21cm×深さ18cm

P_4　長径26cm×短径25cm×深さ26cm

◎貯蔵穴　竈の右脇、南東コーナーに検出された。形状は、長径66cm×短径40cm×深さ32cmで楕円形を呈する。

◎重複　H－296号住居址、H－308号住居址と重複しており、本遺構はH－296号住居址より古く、H－308号住居址より新しい。

◎遺物　土師器片748点、須恵器片29点、石２点、臼玉６点、石鏃１点、石製模造品１点の総数787点が出土。このうち、土師坏３点、土師小甕１点、臼玉６点、石鏃１点を図示した。

◎備考　覆土や出土遺物から本住居址は８世紀前半の時期と考えられる。

H－295号住居址（Fig. 8　PL. 3）

◎位置　X59～60，Y72　　◎面積　(3.32) ㎡　　◎方位　N－62°－W

◎形状　攪乱とW－16号溝との重複により、竈のみの検出。

◎ 竈　東壁南寄りに位置するものと思われる。確認できた範囲で焚口部幅(30)cm、奥行き(86)cmを測る。

◎重複　W－16号溝と重複しており、本遺構のほうが古い。

◎遺物　なし。

◎備考　遺構の検出状況や出土遺物がないため、時期不明。

H－296号住居址（Fig.10　PL. 3）

◎位置　X58～59，Y71～72　　◎面積　(10.35) ㎡　　◎方位　N－80°－E

◎形状　長径（4.22）m　短径（2.52）m　西側一部分は調査区外であるが、現存値から方形を呈すると思われる。掘り込みは25cmで立ち上がり角度は71°である。

◎床面　平坦で踏み固められた堅緻な床面。

◎ 竈　東壁の中央部よりやや南よりに位置し、焚口部幅65cm，奥行き50cmを測る。
焚口部は広く、両袖部に砂岩を加工して使用。四角い堀り方をもつ。

◎ピット　南壁と北壁隅に２基検出。　P_1　長径32cm×短径31cm×深さ25cm
P_2　長径36cm×短径30cm×深さ18cm

◎重複　H－297号住居址、H－308号住居址と重複しており、本遺構が最も新しい。

◎遺物　土師器片441点、須恵器片42点、鉄製品２点、磁器１点の総数486点が出土。このうち、土師坏１点、須恵高台皿１点を図示した。

◎備考　覆土や出土遺物から本住居址は９世紀中頃から後半の時期と考えられる。

H－297号住居址（Fig.10　PL. 4）

◎位置　X59，Y71　　◎面積　(11.04) ㎡　　◎方位　N－87°－W

◎形状　長径3.44m　短径3.40m　残存部から隅丸方形を呈すると思われる。掘り込みは27cmで立ち上がり角度は71°である。

◎床面　平坦で部分的にやや堅緻な面がある。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

◎ 竈　東壁中央部よりやや南寄りに設置されている。焚口部幅33cm，奥行き37cmを測る。

◎遺物　土師器片1185点、須恵器片207点、臼玉１点、鉄製品８点、磁器３点の総数1404点が出土。このうち、土師甑１点、砥石１点を図示した。

◎重複　H－296号住居址、W－16号溝と重複しており、本遺構が最も古い。

◎備考　覆土や出土遺物から本住居址は８世紀の時期と考えられる。

Ｈ－298号住居址（Fig.12　PL.５，６）

◎位置　X59～60，Y69～70　　◎面積　(10.45) ㎡　　◎方位　N－84°－W

◎形状　長径（3.74）m　短径3.02m　隅丸方形を呈する。掘り込みは20cmで立ち上がり角度は78°である。

◎床面　全体的に平坦で、部分的にやや堅緻な面がある。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

◎ 竈　東壁中央部よりやや南寄りに設置されている。焚口部幅44cm，奥行き(55)cmを測る。袖部に石を構築の補強材として用いていた。

◎遺物　土師器片116点、須恵器片75点、石１点、鉄製品２点の総数194点が出土。このうち、土師坏１点、留金具１点を図示した。

◎重複　Ｈ－306号住居址、Ｈ－307号住居址、Ｈ－310号住居址と重複しており、本遺構はＨ－306号住居址、Ｈ－310号住居址より古く、Ｈ－307号住居址より新しい。

◎備考　覆土や出土遺物から本住居址は８世紀後半の時期と考えられる。

Ｈ－299号住居址（Fig.11　PL.４）

◎位置　X58，Y69　　◎面積　(5.61) ㎡　　◎方位　N－90°－E

◎形状　長径3.40m　短径（1.60）m　西側一部分は調査区外であるが、現存値から方形を呈すると思われる。掘り込みは17cmで立ち上がり角度は78°である。

◎床面　ほぼ平坦。部分的にやや堅緻な面がある。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

◎ 竈　東壁南寄りに位置する。焚口部幅42cm、奥行き66cmを測る。左袖部の補強材に石材を使用。支柱石に砂岩を使用。

◎遺物　土師器片150点、須恵器片72点、灰釉陶器片３点、石１点、鉄製品１点、磁器１点の総数228点が出土。このうち、須恵坏１点、灰釉高台椀１点を図示した。

◎重複　Ｈ－310号住居址、W－16号溝、Ｄ－172号土坑と重複しており、本遺構はW－16号溝より古く、Ｈ－310号住居址、Ｄ－172号土坑より新しい。

◎備考　覆土や出土遺物から本住居址は10世紀中頃の時期と考えられる。

Ｈ－300号住居址（Fig.13　PL.４）

◎位置　X59，Y67～68　　◎面積　(9.57) ㎡　　◎方位　N－62°－E

◎形状　長径（3.60）m　短径3.34m　住居址の東側が調査区外へ延びるため、東側一部分は検出できず。確認できた範囲で、ほぼ方形を呈すると思われる。掘り込みは35.5cmで立ち上がり角度は88°である。

◎床面　平坦で踏み固められた堅緻な床面。

◎ 竈　住居址東、東壁が調査区外に延びるため、確認できず。

◎ピット　２基検出。

P_1　長径35cm×短径25cm×深さ18.5cm　P_2　長径26cm×短径25cm×深さ15cm

◎遺物　土師器片519点、須恵器片61点、灰釉陶器片３点、石１点、臼玉３点、鉄製品３点、磁器片３点、縄文片１の総数594点が出土。このうち、縄文片１点、土師坏１点、臼玉３点、刀子１点を図示した。

◎重複　H－301号住居址と重複しており、本遺構のほうが古い。

◎備考　覆土や出土遺物から本住居址は８世紀前半の時期と考えられる。

H－301号住居址（Fig.13　PL.４）

◎位置　X59，Y68　　◎面積　(2.62) m²　　◎方位　N－７°－W

◎形状　長径（3.84）m　短径（1.86）m　住居址の東側が調査区外へ延びるため、東側一部分は検出できず。確認できた範囲で、ほぼ方形を呈すると思われる。掘り込みは17cmで立ち上がり角度は73°である。

◎床面　全体的に平坦で、部分的に凹凸あり。部分的に堅緻な面がある。
柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

◎ 竈　住居址東、東壁が調査区外に延びるため、確認できず。

◎遺物　土師器片106点、須恵器片66点、灰釉陶器片５点の総数177点が出土。このうち、須恵坏１点を図示した。

◎重複　H－300号住居址と重複しており、本遺構のほうが新しい。

◎備考　覆土や出土遺物から本住居址は10世紀前半の時期と考えられる。

H－302号住居址（Fig.11　PL.５）

◎位置　X58～59，Y69～70　　◎面積　(4.58) m²　　◎方位　N－21°－W

◎形状　長径3.38m　短径（2.27）m　西側一部分は調査区外であるが、現存値から方形を呈すると思われる。掘り込みは23cmで立ち上がり角度は68°である。

◎床面　全体に平坦で部分的にやや堅緻な面がある。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

◎ 竈　東壁南寄りに位置する。焚口部幅42cm、奥行き47cmを測る。

◎遺物　土師器片292点、須恵器片161点、灰釉陶器片３点、瓦片１点、石製模造品２点、鉄製品４点の総数463点が出土。このうち、須恵坏１点、剣形品１点を図示した。

◎重複　H－310号住居址、W－16号溝と重複しており、本遺構はH－310号住居址より新しく、W－16号溝より古い。

◎備考　覆土や出土遺物から本住居址は10世紀前半の時期と考えられる。

H－303号住居址（Fig.12　PL.５）

◎位置　X58～59，Y64～65　　◎面積　(11.41) m²　　◎方位　N－17°－W

◎形状　長径3.58m　短径（3.48）m　方形を呈する。掘り込みは３cmで立ち上がり角度は70°である。

◎床面　削平により部分的な残存だが、堅緻な床面を確認できた。

◎ 竈　攪乱により確認できず。

◎遺物　土師器片６点で、図示できたものはなかった。

◎備考　遺構の検出状況や出土遺物が少ないため、時期不明。

Ｈ－304号住居址（Fig.14　PL.１）

◎位置　Ｘ60，Ｙ71～72　◎面積　（0.78）㎡　◎方位　Ｎ－14°－Ｗ

◎形状　長径2.72m　短径(0.49)m　住居址の東側が調査区外へ延びるため、東側一部分は検出できず。確認できた範囲で、ほぼ方形を呈すると思われる。掘り込みは23.5cmで立ち上がり角度は69°である。

◎床面　平坦で踏み固められた堅緻な床面。

◎ 竈　住居址東、東壁が調査区外に延びるため、確認できず。

◎遺物　土師器片９点で、図示できたものはなかった。

◎備考　遺構の検出状況や出土遺物が少ないため、時期不明。

Ｈ－305号住居址（Fig.14　PL.５）

◎位置　Ｘ59～60，Ｙ70～71　◎面積　(2.49)㎡　◎方位　Ｎ－18°－Ｗ

◎形状　長径3.57m　短径(1.17)m　住居址の東側が調査区外へ延びるため、東側一部分は検出できず。確認できた範囲で、ほぼ方形を呈すると思われる。掘り込みは20.5cmで立ち上がり角度は64°である。

◎床面　平坦で部分的に堅緻な面がある。

◎ 竈　住居址東、東壁が調査区外に延びるため、確認できず。

◎ピット　１基検出。　P_1　長径53cm×短径46cm×深さ14.5cm

◎遺物　土師器片58点、須恵器片２点の総数60点が出土。このうち、土師甕１点、土師坏１点を図示した。

◎備考　覆土や出土遺物から本住居址は６世紀中頃の時期と考えられる。

Ｈ－306号住居址（Fig.12　PL.５）

◎位置　Ｘ59～60，Ｙ69　◎面積　(6.39)㎡　◎方位　Ｎ－５°－Ｗ

◎形状　長径3.00m　短径(2.40)m　住居址の東側が調査区外へ延びるため、東側一部分は検出できず。確認できた範囲で、ほぼ方形を呈すると思われる。掘り込みは15.5cmで立ち上がり角度63°である。

◎床面　「土屋根」の崩落と思われる粘土状のブロックが床面において散乱し、それが焼失により土器の塊のようになって検出された。

◎ 竈　住居址東、東壁が調査区外に延びるため、確認できず。

◎遺物　土師器片377点、須恵器片125点で、灰釉陶器片２点、石１点の総数505点が出土。このうち須恵高台皿２点、須恵坏１点を図示した。

◎重複　H―298号住居址、H―307号住居址、H―310号住居址と重複しており、本遺構が最も新しい。

◎備考　覆土や出土遺物から本住居址は10世紀初頭の時期と考えられる。

H―307号住居址（Fig.15　PL.５，６）

◎位置　X59，Y69　　◎面積　(3.02)㎡　　◎方位　N―86°―E

◎形状　長径(1.98)m　短径(1.87)m　隅丸方形を呈すると思われる。掘り込みは40.5cmで立ち上がり角度80°である。重複により削られ、北西部のみ検出。

◎床面　平坦で踏み固められた堅緻な床面。

◎ 竈　調査区域内には検出されなかった。

◎遺物　土師器片22点、須恵器片１点の総数23点が出土。このうち、土師高坏１点を図示した。

◎重複　H―298号住居址、H―306号住居址、H―310号住居址と重複しており、本遺構が最も古い。

◎備考　覆土や出土遺物から本住居址は６世紀前半の時期と考えられる。

H―308号住居址（Fig.９　PL.１）

◎位置　X58，Y72　　◎面積　(0.08)㎡　　◎方位　N―93°―E

◎形状　調査区内の西壁で、竈のみの検出。

◎ 竈　東壁に位置すると思われる。確認できた範囲で、焚口部幅(36)cm，奥行き(34)cmを測る。

◎遺物　なし。

◎重複　H―294号住居址、H―296号住居址と重複しており、本遺構が最も新しい。

◎備考　竈のみの検出のため、時期は不明。

H―309号住居址（Fig.―　PL.１）

◎位置　X58，Y71　　◎面積　(0.08)㎡　　◎方位　N―85°―E

◎形状　調査区内の西壁で、竈のみの検出。

◎ 竈　東壁に位置すると思われる。確認できた範囲で、焚口部幅(32)cm，奥行き(28)cmを測る。

◎遺物　なし。

◎備考　竈のみの検出のため、時期は不明。

H－310号住居址（Fig.13　PL.5，6）

◎位置　X58～59，Y69～70　　◎面積　(13.45) ㎡　　◎方位　N－93°－E

◎形状　長径4.13m　短径3.66m　隅丸方形を呈する。掘り込みは48.5cmで立ち上がり角度83°である。

◎床面　全体的に平坦で部分的にやや堅緻な面がある。

◎ 竈　東壁の南よりに位置し、焚口部幅45cm，奥行き90cmを測る。
両袖部に砂岩を加工して使用。支柱石に河原石を使用。

◎貯蔵穴　竈の右脇、南東コーナーに検出。
P_1　長径77cm×短径62cm×深さ78.5cm　楕円形を呈する。

◎遺物　土師器片1262点、須恵器片131点、灰釉陶器片２点、石２点の総数1397点が出土。このうち、土師坏２点、須恵蓋１点、須恵高台皿１点、叩石１点を図示した。

◎重複　H－298号住居址、H－299号住居址、H－302号住居址、H－306号住居址、H－307号住居址、W－16号溝、D－176号土坑と重複しており、本遺構はH－298号住居址、H－307号住居址、D－176号土坑より新しく、H－299号住居址、H－302号住居址、H－306号住居址、W－16号溝より古い。

◎備考　覆土や出土遺物から本住居址は９世紀初頭の時期と考えられる。

H－311号住居址（Fig.15　PL.7）

◎位置　X59～60，Y74～75　◎面積　(9.52) ㎡　　◎方位　N－85°－E

◎形状　長径4.07m　短径（2.58）m　住居址の南側が調査区外へ延びるため、南側一部分は検出できず。確認できた範囲で、ほぼ方形を呈すると思われる。掘り込みは47cmで立ち上がり角度79°である。

◎床面　削平により部分的な残存だが、堅緻な床面を確認できた。

◎ 竈　住居址南部が調査区外に延びているため、確認できず。

◎遺物　土師器片315点、須恵器片12点、石製模造品１点の総数328点が出土。このうち土師坏２点を図示した。

◎重複　H－292号住居址、W－15号溝と重複しており、本遺構はH－292号住居址より新しく、W－15号溝より古い。

◎備考　出土遺物からは７世紀前半の時期と考えられるが、遺構の重複等の関係により遺物も流れ込みの可能性がある。

H－312号住居址（Fig.14　PL.7）

◎位置　X59，Y73～74　　◎面積　(6.16)㎡　　◎方位　N－80°－E

◎形状　長径3.10m　短径(2.10)m　西側一部分は調査区外であるが、現存値から方形を呈する

と思われる。掘り込みは36cmで立ち上がり角度86°である。

◎床面　全体的に平坦で堅緻な床面。

◎ 竈　住居址東部が調査区外に延びているため、確認できず。

◎遺物　土師器片149点で、うち土師坏３点を図示した。

◎重複　H—313号住居址、W—15号溝と重複しており、本遺構はH—313号住居址より新しく、W—15号溝より古い。

◎備考　覆土や出土遺物から本住居址は６世紀末から７世紀初頭の時期と考えられる。

H—313号住居址（Fig.11　PL.７）

◎位置　X59，Y73～74　　◎面積　(4.60)m²　　◎方位　N—168°—E

◎形状　長径308m　短径(1.54)m　西側一部分は調査区外であるが、現存値から方形を呈すると思われる。掘り込みは53cmで立ち上がり角度57°である。

◎床面　全体的に平坦で堅緻な床面。

◎ 竈　南壁に位置し、焚口部幅36cm，奥行き68cmを測る。

◎貯蔵穴　竈の西に１基検出。楕円形を呈する。　P_1　長径55cm×短径46cm×深さ86cm

◎遺物　土師器片115点、須恵器片２点の総数117点が出土。このうち、土師甕２点を図示した。

◎重複　H—312号住居址、W—15号溝と重複しており、本遺構が最も古い。

◎備考　覆土や出土遺物から本住居址は６世紀初頭の時期と考えられる。

2　掘立柱建物址

B—２号建物址（Fig.13　PL.７）

◎位置　X58，Y62～63　　◎面積　5.88m²　　◎方位　N—17°—W

◎形状　方形。

◎柱穴　４基検出。

P_1　長径52cm×短径42cm×深さ34cm

P_2　長径46cm×短径34cm×深さ32cm

P_3　長径40cm×短径35cm×深さ35cm

P_4　長径38cm×短径32cm×深さ35cm

各ピット間　P_1—P_2…2.60m

P_2—P_3…2.32m

P_3—P_4…2.35m

P_1—P_4…2.45m

◎遺物　なし。

3　溝

W－15号溝（Fig.16　PL. 2）

◎位置　X58～59，Y73～75

◎形状等　確認面で上幅56cm、下幅41cm、深さ25cmを測り、方位をN－31°－Wにとる。断面形態は逆台形を呈し、土層はレンズ状堆積を示している。

◎遺物　土師器片79点、須恵器片13点、灰釉陶器片１点、鉄製品１点の総数94点が出土。このうち図示できたものはなかった。

◎重複　H－311号住居址、H－312号住居址、H－313号住居址、W－17号溝を切る。

W－16号溝（Fig.16　PL. 1）

◎位置　X58～60，Y69～73

◎形状等　確認面で上幅76cm、下幅61cm、深さ58.5cmを測り、方位をN－28°－Wにとる。断面形態はほぼ垂直に掘り込まれており、土層はほぼ水平堆積を示している。

◎遺物　土師器片950点、須恵器片174点、灰釉陶器片３点、鉄製品４点、磁器３点の総数1134点が出土。このうち、釘３点を図示した。

◎重複　H－295号住居址、H－297号住居址、H－299号住居址、H－302号住居址、H－310号住居址を切る。

W－17号溝（Fig.16　PL. 7）

◎位置　X59～60，Y74～75

◎形状等　確認面で上幅93cm、下幅70cm、深さ55.5cmを測り、方位をN－60°－Eにとる。断面形態はほぼ逆台形に掘り込まれている。

◎遺物　土師器片79点、須恵器片13点、臼玉１点、石製模造品１点、縄文片１点の総数95点が出土。このうち、剣形品２点、縄文片１点、留金具１点を図示した。

◎重複　H－311号住居址を切る。

4　土　　坑

D－172号土坑（Fig.16　PL. 1）

◎位置　X58，Y69

◎形状等　長径76cm、短径(72)cmの円形。深さ23cmを測る。

◎遺物　なし。

D－173号土坑（Fig.16　PL. 5）

◎位置　X59，Y69

◎形状等　長径36cm、短径28cmの円形。深さ35cmを測る。

◎遺物　なし。

D－174号土坑（Fig.16　PL. 5）

◎位置　X59，Y69

◎形状等　長径32cm、短径30cmの円形。深さ30cmを測る。

◎遺物　なし。

D－175号土坑（Fig.16　PL. 5）

◎位置　X59，Y68

◎形状等　長径30cm、短径26cmの円形。深さ47cmを測る。

◎遺物　なし。

D－176号土坑（Fig.16　PL. 1）

◎位置　X59，Y70

◎形状等　長径142cm、短径125cmのほぼ円形。深さ82cmを測る。

◎遺物　土師器片167点、須恵器片14点の総数181点が出土。このうち、土師坏１点、土師甕１点を図示した。

◎備考　覆土や出土遺物から本住居址は６世紀中頃の時期と考えられる。

D－177号土坑（Fig.16　PL. 2）

◎位置　X59，Y73～74

◎形状等　長径78cm、短径61cmの楕円形。深さ30cmを測る。

◎遺物　土師器片11点で、図示できるものはなかった。

Tab. 1　大屋敷遺跡VI土器観察表

番号	出土位置	器　形	大きさ		①胎土	②焼成	③色調	④残存	成・整形方法		備　考	Fig
			口径	器高					口縁・胴部	底　部		
1	H-292	土師坏	(12.1)	5.3	細粒	良好	にぶい橙	1/3	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。		17
2	H-292	土師坏	12.0	5.3	細粒	良好	にぶい橙	4/5	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。		17
3	H-292	土師坏	13.0	5.0	細粒	良好	橙	1/2	外傾。篦削り。	篦削り。		17
4	H-292	土師坏	11.9	4.8	中粒	良好	橙	2/3	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。		17
5	H-292	土師坏	(13.0)	(4.5)	細粒	良好	橙	1/2	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。	内面に放射状暗文	17
6	H-292	土師坏	(12.6)	5.0	細粒	良好	橙	1/2	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。		17
7	H-292	土師坏	12.6	5.0	細粒	良好	にぶい橙	ほぼ完形	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。		17
8	H-292	土師坏	12.8	5.0	細粒	良好	にぶい赤褐	1/2	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。		17
9	H-292	土師坏	12.6	5.7	細粒	良好	にぶい橙	2/3	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。		17
10	H-292	土師坏	(12.0)	4.7	細粒	良好	にぶい橙	1/2	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。		17
11	H-292	土師坏	(15.2)	6.0	中粒	良好	明赤褐	1/3	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。		17
12	H-292	土師甑	13.6	(11.3)	細粒	良好	にぶい黄橙	1/2	外反。横撫で。篦削り。	欠損。		17
13	H-292	土師甕	25.8	(21.0)	細粒	良好	明黄褐	1/2	外反。横撫で。篦削り。	欠損。	口縁部に最大径。	17
14	H-292	土師小甕	(14.0)	15.5	細粒	良好	にぶい黄橙	1/2	外反。横撫で。篦削り。	篦削り。	口縁部に指頭痕有り。	17
15	H-294	土師坏	10.8	3.6	細粒	良好	橙	完形	内傾。横撫で。篦削り。	篦削り。		18
16	H-294	土師坏	(11.2	3.1	細粒	良好	橙	1/2	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。	内面にスス付着。	18
17	H-294	土師坏	13.8	4.0	細粒	良好	橙	完形	内傾。横撫で。篦削り。	篦削り。	口縁部に指頭痕、スス付着。	18
18	H-296	須恵高台皿	(14.0)	2.6	細粒	良好	明オリーブ灰	1/4	外傾。轆轤。	回転糸切り撫で調整。高台後付け	底部周辺部篦調整	18
19	H-296	土師坏	(12.0)	(3.0)	細粒	良好	にぶい橙	1/4	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。		18
20	H-297	土師甕	—	(7.7)	細粒	良好	にぶい赤褐	—	欠損。篦削り。	篦削り。		18
21	H-298	土師坏	(12.0)	(2.7)	細粒	良好	橙	1/5	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。		18
22	H-299	須恵坏	13.2	3.9	細粒	良好	灰黄	ほぼ完形	外傾。轆轤。	回転糸切り撫で調整。		18
23	H-299	灰釉高台椀	—	(4.2)	細粒	良好	灰白	1/2	内湾。轆轤。	回転篦調整。高台後付け。	釉薬浸し漬け。	18
24	H-300	土師坏	9.8	3.1	細粒	良好	橙	ほぼ完形	直立。横撫で。篦削り。	篦削り。		18
25	H-301	須恵坏	12.8	4.0	細粒	良好	灰白	ほぼ完形	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。		18
26	H-302	須恵坏	—	(3.6)	細粒	良好	にぶい黄橙	1/2	欠損。	回転糸切り未調整。		18
27	H-305	土師坏	(12.0)	4.5	細粒	良好	橙	1/8	直立。横撫で。篦削り。	欠損。		18
28	H-305	土師甕	(15.8)	(19.5)	細粒	良好	にぶい橙	2/3	外反。縦方向篦削り。	欠損。		18
29	H-306	須恵高台皿	(13.4)	2.7	細粒		灰	1/2	外傾。轆轤。	回転糸切り撫で調整。高台後付け		18
30	H-306	須恵高台皿	13.2	3.0	細粒	良好	明オリーブ灰	2/3	外傾。轆轤。	回転糸切り撫で調整。高台後付け		18
31	H-306	須恵坏	(13.8)	3.8	細粒	良好	灰白	1/3	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。		19
32	H-307	土師高坏	—	(6.0)	細粒	良好	橙	1/2	欠損。横撫で。	脚部に暗文。		19
33	H-310	土師坏	12.0	3.5	細粒	良好	にぶい橙	2/3	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。		19
34	H-310	須恵蓋	19.0	4.2	細粒	良好	明緑灰	4/5	轆轤。つまみ部回転篦調整。口縁部に返し。			19
35	H-310	土師坏	(14.0)	3.3	細粒	良好	橙	1/3	直立。横撫で。篦削り。	篦削り。		19
36	H-310	須恵高台皿	14.2	2.8	細粒	良好	灰白	1/2	外傾。轆轤。	回転糸切り撫で調整。高台後付け		19
37	H-311	土師坏	(12.0)	(3.1)	細粒	良好	褐灰	1/8	直立。横撫で。篦削り。	篦削り。		19
38	H-311	土師坏	(14.0)	(4.5)	細粒	良好	橙	1/8	外傾。横撫で。篦削り。	欠損。		19
39	H-312	土師坏	(9.8)	5.2	細粒	良好	橙	1/2	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。		19
40	H-312	土師坏	(12.4)	(4.3)	細粒	良好	にぶい橙	1/4	直立。横撫で。篦削り。	篦削り。		19
41	H-312	土師坏	(14.0)	6.0	細粒	良好	にぶい橙	1/3	直立。横撫で。篦削り。	篦削り。		19
42	H-313	土師甕	—	(10.0)	細粒	良好	にぶい橙	—	欠損。	縦方向篦削り。		19
43	H-313	土師甕	—	(6.2)	細粒	良好	赤褐	—	欠損。篦削り。	篦削り。		19
44	D-176	土師坏	(10.8)	(2.7)	細粒	良好	橙	1/4	直立。横撫で。篦削り。	欠損。		19
45	D-176	土師甕	16.0	(7.2)	細粒	良好	浅黄	1/3	外反。横撫で。篦削り。	欠損。		19

注）表の表記は以下の基準で行った。
①胎土は、細粒（0.9㎜以下）、中粒（1.0～1.9㎜）、粗粒（2.0㎜以上）とした。
②焼成は、極良、良好、不良の三段階。
③色調は土器外面で観察し、色名は新版標準土色帖（小山・竹原1976）によった。
④大きさの単位は㎝であり、現存値を［　］、復元値を（　　）で示した。

Tab. 2　石器・石製品観察表

番号	出土位置	器　形	長さ	幅	厚	重さ	石　材	備　考	Fig
1	H-292	臼玉	—	0.6	0.3	0.2	滑石	完形。	20
2	H-292	臼玉	—	1.3	0.3	0.4	滑石	ほぼ完形。	20
3	H-294	臼玉	—	0.8	0.8	0.9	滑石	完形。	20
4	H-294	臼玉	—	0.9	0.5	0.7	滑石	ほぼ完形。	20
5	H-294	臼玉	—	0.9	0.7	1.0	滑石	ほぼ完形。	20
6	H-294	臼玉	—	0.8	0.5	0.5	滑石	ほぼ完形。	20
7	H-294	臼玉	—	(1.3)	0.4	0.6	滑石	1/2残存。	20
8	H-294	臼玉	—	0.7	0.5	0.4	滑石	ほぼ完形。	20
9	H-300	臼玉	—	0.5	0.3	0.2	滑石	完形。	20
10	H-300	臼玉	—	0.5	0.4	0.2	滑石	完形。	20
11	H-300	臼玉	—	0.5	0.3	0.1	滑石	完形。	20
12	W-17覆土	臼玉	—	1.2	0.5	1.2	滑石	ほぼ完形。	20
13	H-292	管玉	2.2	0.6	0.6	1.3	滑石	完形。	20
14	H-292	管玉	2.2	0.9	0.7	2.6	滑石	完形。	20
15	H-302	剣形品	(1.2)	(2.2)	0.3	1.8	滑石	1/2残存。表裏両面に斜方向の磨き。	20
16	W-17覆土	剣形品	(2.2)	(1.8)	0.2	1.2	滑石	1/2残存。表裏両面に斜方向の磨き。	20
17	H-294	石鏃	2.3	1.1	0.3	0.6	黒色頁岩	有舌尖頭器。有舌部一部欠損。	20
18	H-297	砥石	13.2	6.0	4.0	580	砥沢石	表面、裏面に使用痕がある。	20
19	H-310	叩石	11.6	4.2	3.2	210	砥沢石	扁平な棒状の半欠品。先端に打痕。	20

注）表の記載で、大きさの単位はcm、重さの単位はｇであり、現存値は（　　）で示した。

Tab. 3　縄文式土器観察表

番号	出土位置	①胎土	②焼成	③色調	④残存	文様要素・文様構成・器形の特徴	備　考	Fig
1	H-300	中粒	良好	橙	胴部	隆帯。	縄文中期	20
2	W-17覆土	中粒	良好	橙	胴部	縄文 RL。	縄文中期	20
3	X59Y70	中粒	良好	明赤褐	胴部	隆帯。平行沈線。連続爪形文。	縄文中期	20

注）表の表記は以下の基準で行った。
①胎土は、細粒（0.9mm以下）、中粒（1.0～1.9mm）、粗粒（2.0mm以上）とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名を記載した。
②焼成は、極良、良好、不良の三段階。
③色調は土器外面で観察し、色名は新版標準土色帖（小山・竹原1976）によった。

Tab. 4　鉄器観察表

番号	出土位置	器　形	長さ	幅	厚	重さ	備　考	Fig
1	W-16覆土	釘	(3.3)	0.7	0.5	1/3	先端部、頭部欠損。角釘。	20
2	W-16覆土	釘	(4.5)	0.4	0.4	2/3	先端部欠損。頭部形状折頭式の角釘。	20
3	W-16覆土	釘	(5.5)	0.4	0.4	4/5	頭部欠損。角釘。	20
4	H-298	留金具	(3.0)	4.4	0.2	1/3	フック状の曲がり。	20
5	H-300	刀子	(15.0)	1.2	0.4	4/5	先端部、頭部欠損。断面逆三角形。茎部が細くなる。	20

注）表の記載で、大きさの単位はcm、重さの単位はｇであり、現存値は（　　）で示した。

Ⅵ　大屋敷遺跡についての総括

大屋敷遺跡については、1993年来、道路部分の発掘調査が６次にわたって行われてきたが、一応、平成12年度をもって終了する運びとなった。そこで、今までの成果を総括して大きなまとめとしたい。

(1)　遺跡の位置と規模

遺跡は利根川右岸の前橋・箕郷線、総社陸橋の南に接している。道路をはさんで北側には総社古墳群の宝塔山古墳、蛇穴山古墳が指呼の間にあり、八幡川を距てた南西400mには山王廃寺跡がある。周辺には他にも多くの遺跡が集中している。(周辺の遺跡参照)

遺跡は古墳時代中期終わりころから平安時代の竪穴住居跡を中心としており、この他に掘立柱建物、井戸、溝等が密に分布している状況をみてとることができる。その範囲は、全域に及ぶ道路部分の調査で東西70m、南北150mほどの範囲におよんでいることがわかる。東を天狗岩用水(当時は低地を形成)、西を八幡川で画された南東方向に舌状にのびる台地の先端部に位置している。こうした位置関係にある本遺跡は、出土遺物にも特殊な物を含んでおり、山王廃寺、総社古墳群とも深くかかわっている様相をみてとることができる。

(2)　遺構分布の傾向と特殊出土遺物

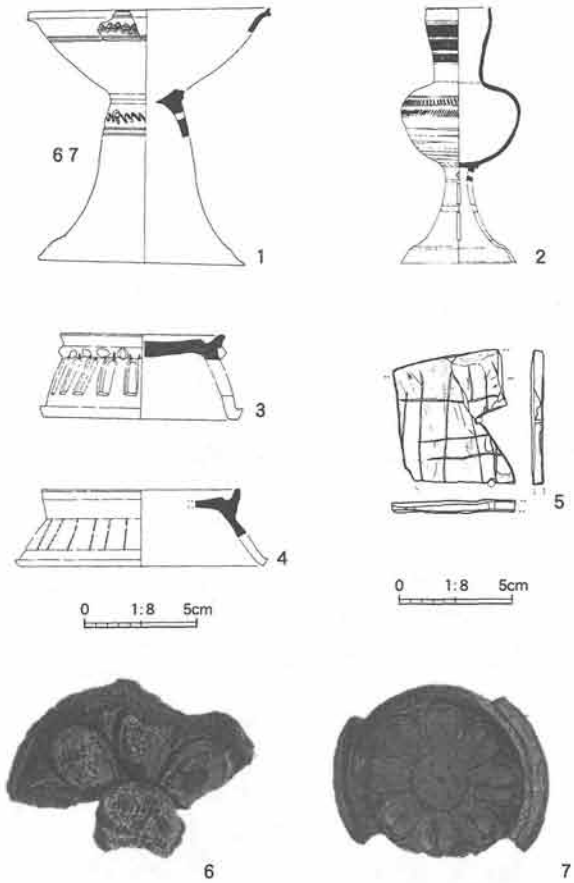
６次に及ぶ発掘調査で遺構分布の傾向をみると、竪穴住居跡はかなり稠密な分布をみせてまんべんなく検出されているが、調査部分の南西部分に竪穴住居がスッポリ欠落する部分がある。その範囲は東西30m、南北50mほどに達している。その東縁部には南北棟の掘立柱建物や井戸などもあり、一部溝で囲む部分などもある。道路以外は未調査のため確定的なことはいえないが、掘立柱建物が集中することも考えられる。この部分をとりまくように竪穴住居群が検出され、これらの内、特殊な性格をもつ遺物が、周縁の竪穴住居や溝中から出土していることが注目される。

特殊遺物の内からいくつかを取り上げたが、大きくは古墳時代後期から奈良時代のものを図示したが、他にも５世紀末～６世紀初頭の大量の石製模造品や供献具としての高坏や瓶、壺類などを多く伴うなどの特徴をもつこともつけ加えておきたい。

図示した１、２は大型器台、台付長頸壺でともに６世紀中葉のものである。大型器台は竪穴住居からの出土であるが極めて異例である。この竪穴住居も前述の竪穴住居の欠落部の縁辺に位置するものである。また、台付長頸瓶も竪穴住居からの出土であるが前述の大型器台を出土した竪穴と隣接している。これら二つは共に一般的には古墳の副葬品として検出されるが、県内でも前橋前二子古墳や高崎観音山古墳、伊勢崎原之城遺跡などから発見されている。多くの石製模造品も含めて極めて祭祀的色彩の強い遺物が多量に出土している点が注目される。

また、3～5は、奈良時代を中心とした時期のものであるが、3、4は円面硯、5は粘板岩に筋彫りを施した呪符である。円面硯は時期的に幅も考えられるが、いずれにしても官衙、寺院等で検出されたケースが多く、僅かの部分の調査で2個の硯の出土をみたことは特筆に値しよう。また、呪符は「井」を重ねた魔除け記号とみられる。この他にも同種の記号を伴うものも多く、遺物的に特異なものである。

更に、6、7に示した瓦が住居や溝から出土している。この二種は共に山王廃寺の創建期とみられる軒丸瓦で、これが持ち込まれていることは先の出土遺物ともからめて考えると、大屋敷遺跡が単なる集落とは異なる性格を有する遺跡であることがわかる。



(3) 大屋敷遺跡の性格

地理的に近接する山王廃寺・総社古墳群中の終末期古墳との近接等を考慮して、大屋敷遺跡の性格について論及してみたい。まず注目されるのは、出土遺物の祭祀的傾向が強烈にうかがえること。また、円面硯等の出土にみられる官衙的性格、また山王廃寺の瓦による直接的関連がうかがえる点などがある。しかも、その年代幅が山王廃寺と全く同じ5世紀末ころから平安時代まで、継続してうかがえる点が注目される。

このことから、大屋敷遺跡は山王廃寺と深くかかわった遺跡であることが明らかになった。そこで山王廃寺周辺の調査で、主軸方向が寺跡と大きく異なる寺に先行する遺跡群があり、これが一辺90m四方ほどの豪族の屋敷構え的な性格を想定した。そこに氏寺としての山王廃寺が創建されたとの考えを示したことがある。

一方、山王廃寺は総社古墳群中のとり分け宝塔山古墳、蛇穴山古墳との関連が石材の扱いを中心に論ぜられている。こうした両者の関係の中に更に大屋敷遺跡を加え、豪族の居宅と氏寺しての山王周辺、その豪族の奥津城としての総社古墳群、その中間にあって特に古墳時代後期から奈良時代にかけての「晴れの場」としての政治の場としての大屋敷遺跡という性格付けが可能なのではないだろうか。紙数の都合で論を尽くせない点がある。今後を期したい。

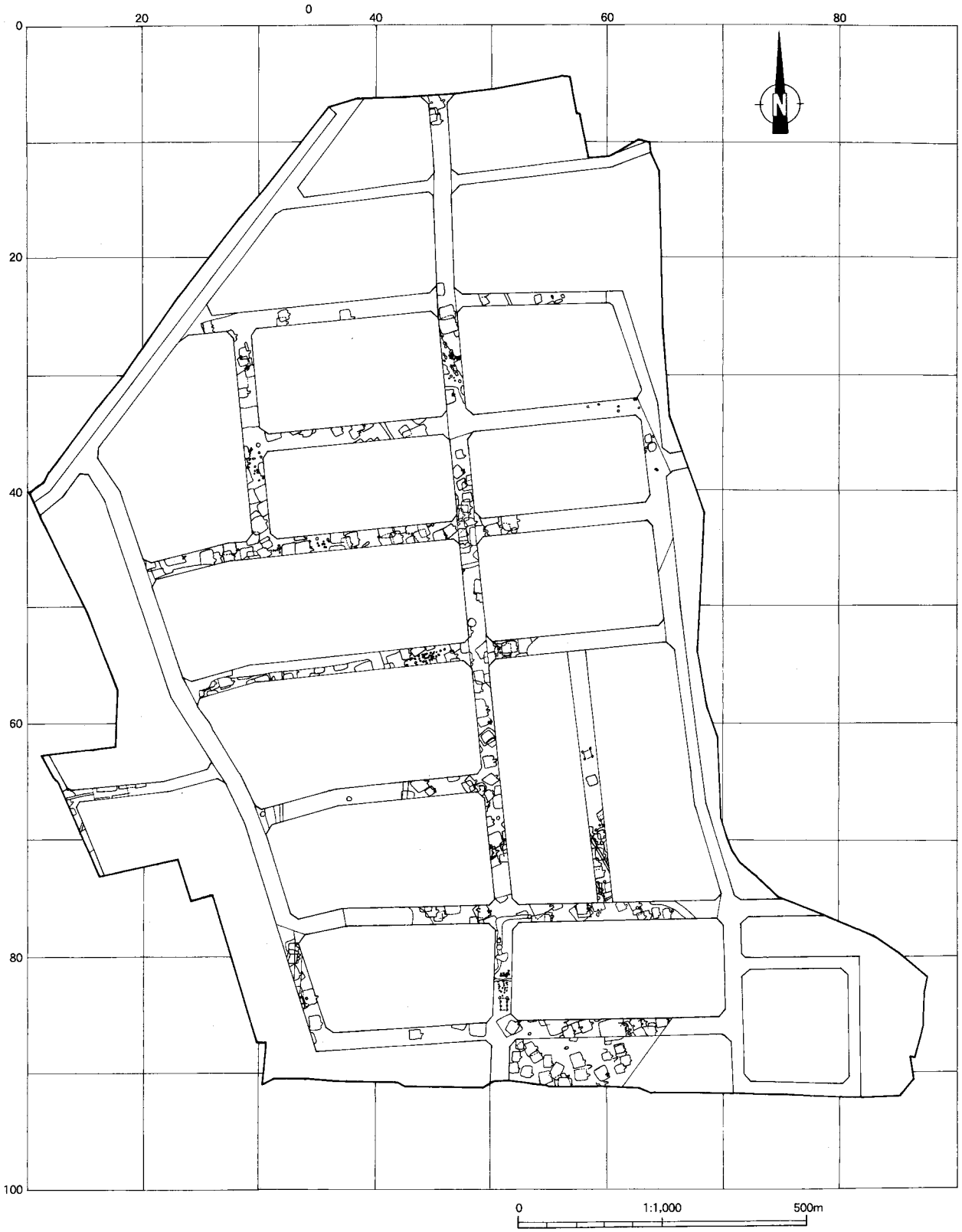


Fig. 6　大屋敷遺跡調査全図

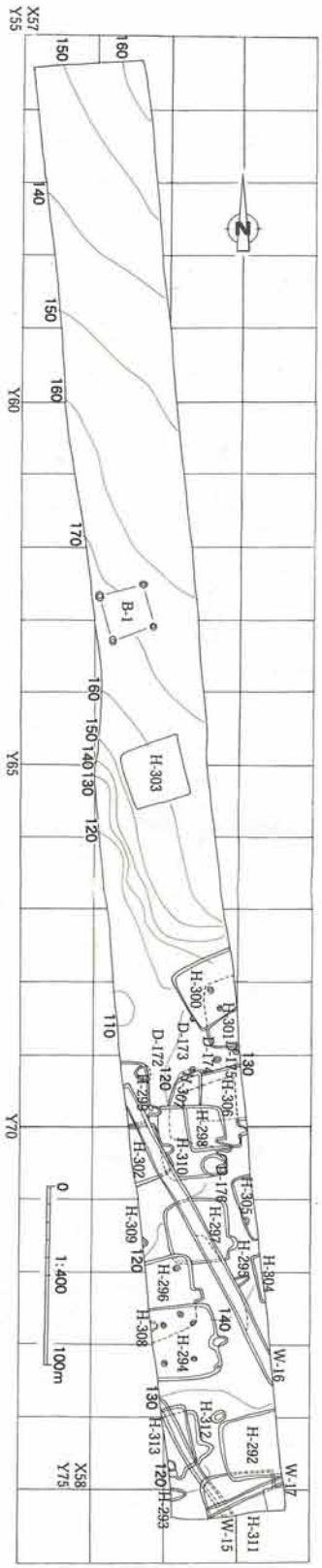
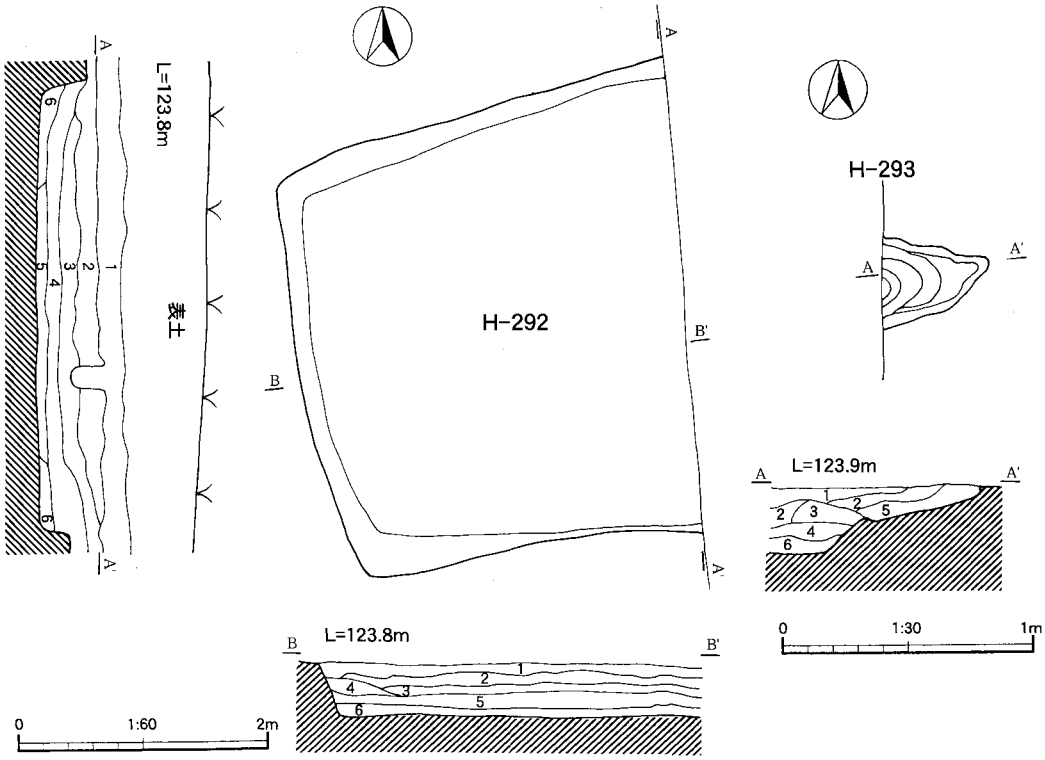


Fig. 7　遺跡・遺構全体図



H－292号住居址
1層　褐色細砂層　As-C３％、Hr-FP極少
2層　暗褐色細砂層　As-C５％、Hr-FP、焼土粒共に極少
3層　黒褐色細砂層　As-C、炭化物共に極少
4層　暗褐色細砂層　As-C、粘土粒共に極少
5層　暗褐色細砂層　As-C５％、焼土粒３％
6層　暗褐色細砂層　As-C３％、粘土粒５％、Hr-FP極少

H－293号住居址竈
1層　暗赤褐色細砂層　As-C10％、焼土粒、粘土粒共に極少
2層　にぶい赤褐色細砂層　焼土粒多量に含む
3層　黄褐色微砂層　粘土粒極少
4層　にぶい赤褐色細砂層　粘土粒、炭化物多量に含む
5層　赤褐色細砂層　焼土粒、粘土粒多量に含む
6層　灰赤褐色微砂層　灰、焼土粒多量に含む

H－295号住居址竈
1層　明赤褐色細砂層　As-C極少、焼土粒20％
2層　にぶい赤褐色細砂層　焼土粒10％
3層　暗赤褐色細砂層　灰５％、焼土粒10％
4層　黒褐色細砂層　粘土粒極少、炭化物５％
5層　暗赤褐色細砂層　粘土粒３％、As-C極少
6層　橙色微砂層　焼土粒30％

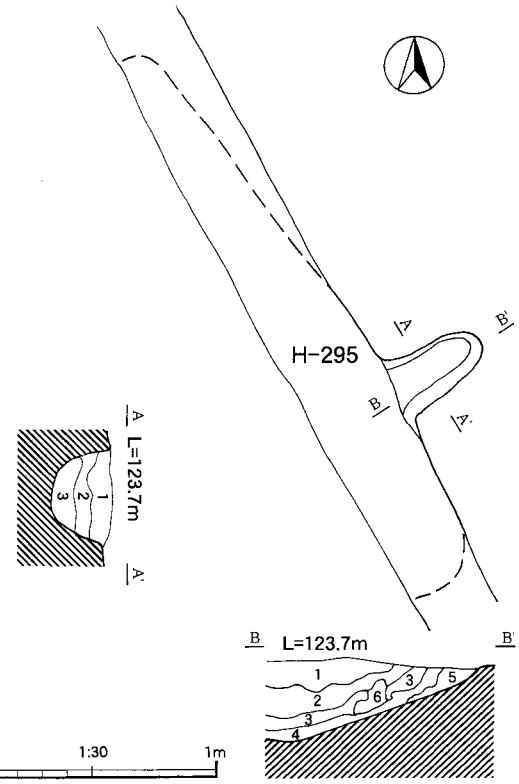
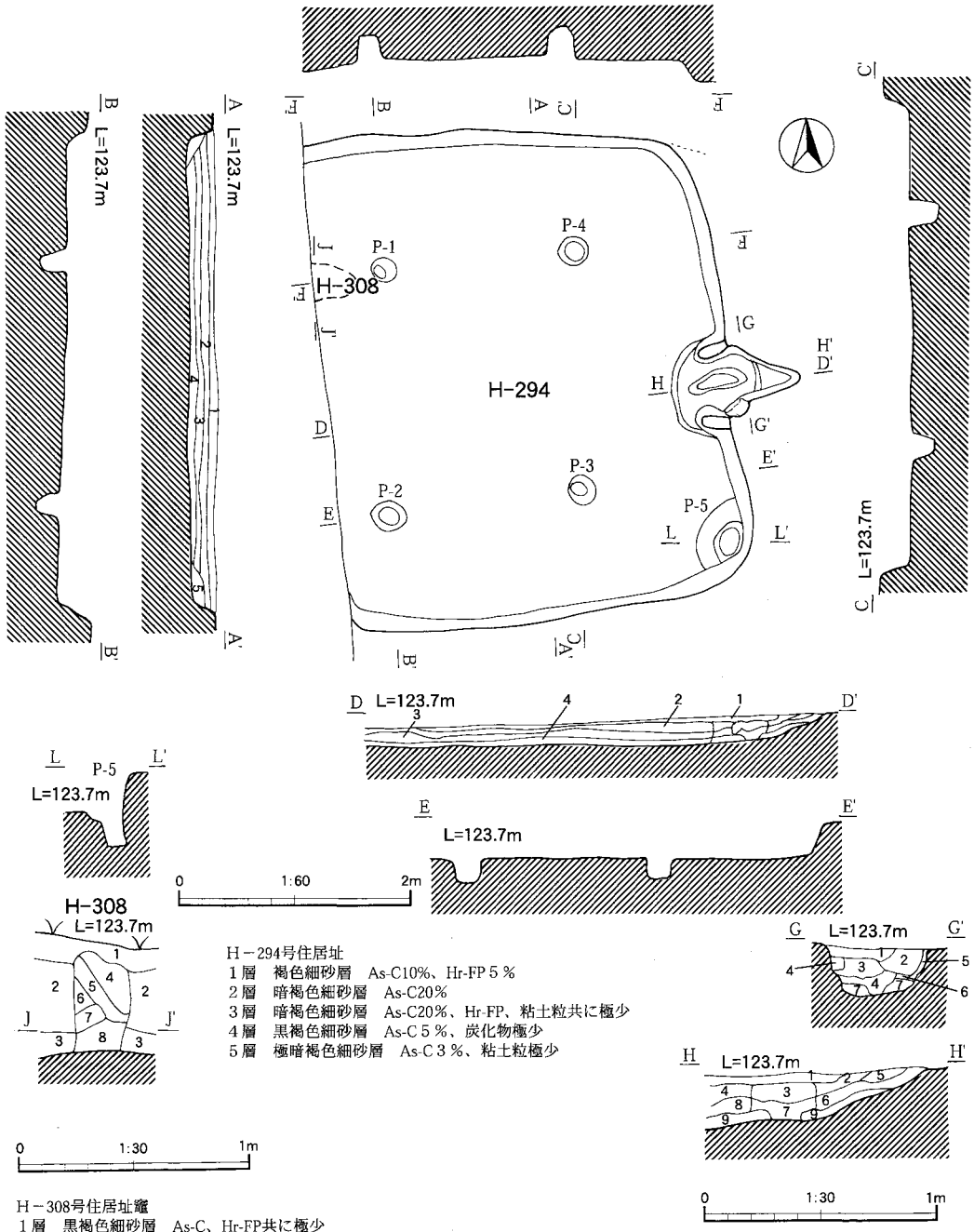


Fig. 8　H—292・293・295号住居址

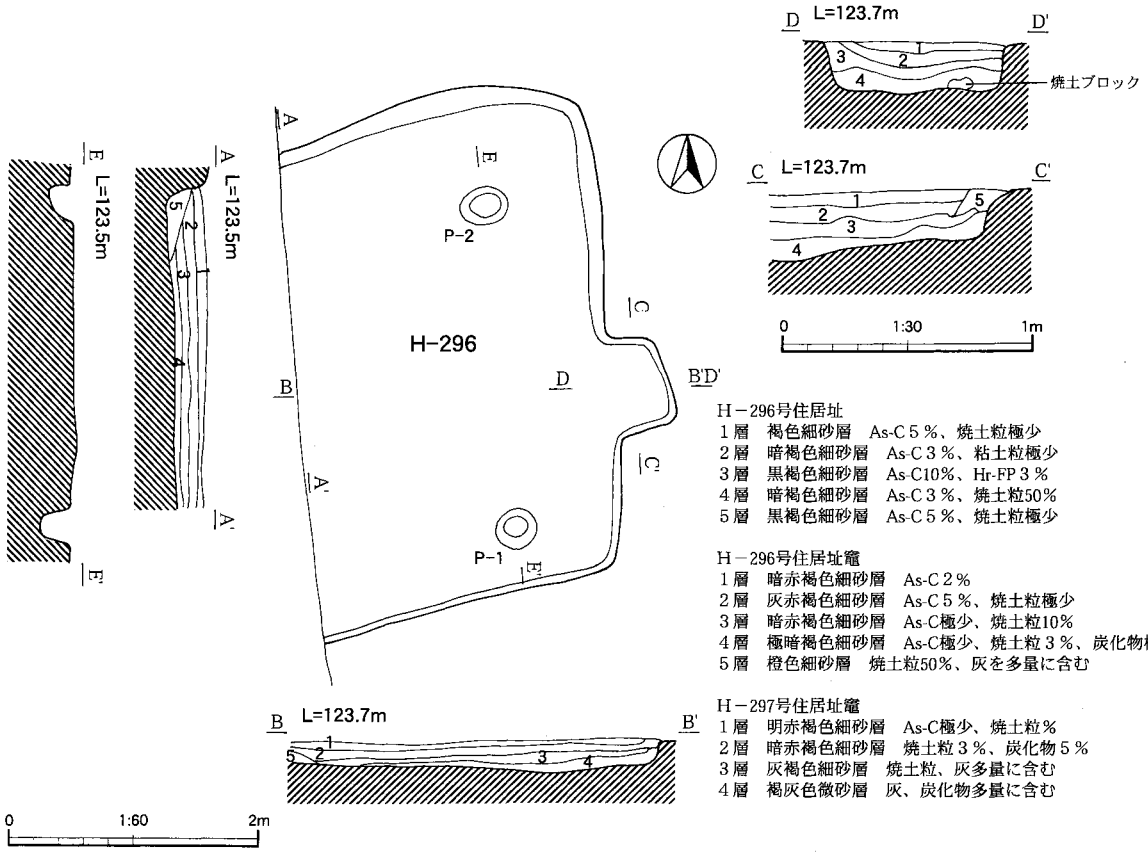


H－294号住居址
1層　褐色細砂層　As-C10%、Hr-FP５％
2層　暗褐色細砂層　As-C20％
3層　暗褐色細砂層　As-C20％、Hr-FP、粘土粒共に極少
4層　黒褐色細砂層　As-C５％、炭化物極少
5層　極暗褐色細砂層　As-C３％、粘土粒極少

H－308号住居址竈
1層　黒褐色細砂層　As-C、Hr-FP共に極少
2層　暗褐色細砂層　As-C３％、焼土粒極少
3層　褐灰色細砂層　As-C、粘土粒、灰共に極少
4層　橙色細砂層　As-C極少、焼土粒30％
5層　にぶい赤褐色細砂層　As-C２％、粘土粒10％
6層　灰褐色細砂層　焼土粒15％、粘土粒10％
7層　褐灰色微砂層　As-C、焼土粒共に極少、灰、炭化物多量に含む

H－294号住居址竈
1層　明赤褐色細砂層　粘土粒、焼土粒共に極少
2層　暗赤褐色細砂層　粘土粒30％
3層　にぶい赤褐色細砂層　粘土粒、灰共に極少
4層　にぶい赤褐色細砂層　As-C10％、粘土粒３％
5層　暗赤褐色細砂層　粘土粒極少
6層　赤褐色細砂層　焼土粒多量に含む
7層　灰褐色微砂層　焼土粒、粘土粒、灰多量に含む
8層　褐灰色細砂層　炭化物、粘土粒多量に含む
9層　灰褐色微砂層　灰、炭化物多量に含む

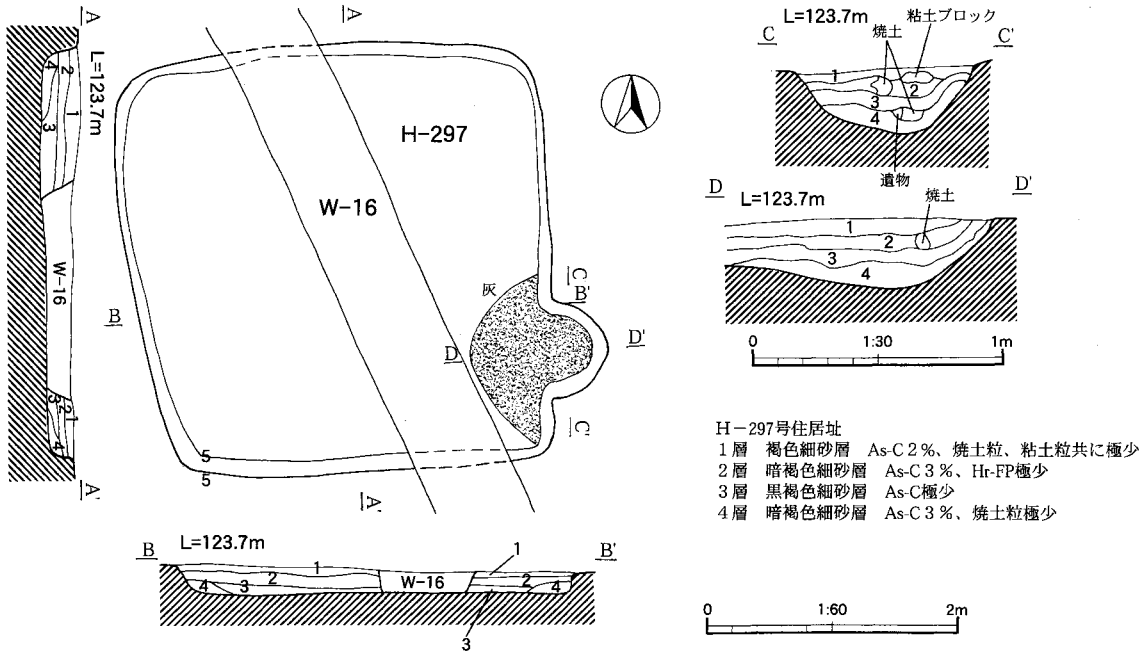
Fig. 9　H－294・308号住居址



H－296号住居址
1層　褐色細砂層　As-C５％、焼土粒極少
2層　暗褐色細砂層　As-C３％、粘土粒極少
3層　黒褐色細砂層　As-C10％、Hr-FP３％
4層　暗褐色細砂層　As-C３％、焼土粒50％
5層　黒褐色細砂層　As-C５％、焼土粒極少

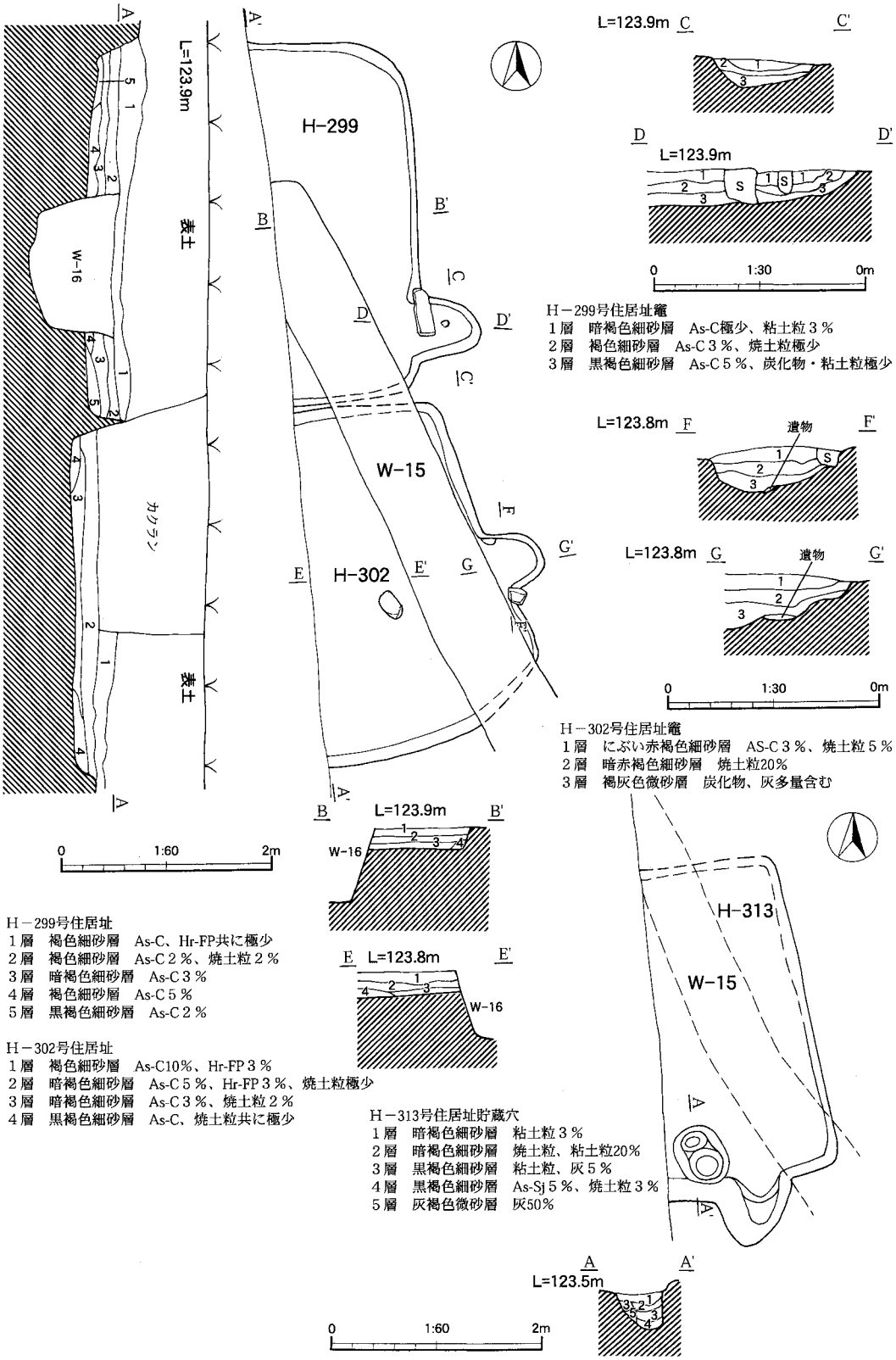
H－296号住居址竈
1層　暗赤褐色細砂層　As-C２％
2層　灰赤褐色細砂層　As-C５％、焼土粒極少
3層　暗赤褐色細砂層　As-C極少、焼土粒10％
4層　極暗褐色細砂層　As-C極少、焼土粒３％、炭化物極少
5層　橙色細砂層　焼土粒50％、灰を多量に含む

H－297号住居址竈
1層　明赤褐色細砂層　As-C極少、焼土粒％
2層　暗赤褐色細砂層　焼土粒３％、炭化物５％
3層　灰褐色細砂層　焼土粒、灰多量に含む
4層　褐灰色微砂層　灰、炭化物多量に含む



H－297号住居址
1層　褐色細砂層　As-C２％、焼土粒、粘土粒共に極少
2層　暗褐色細砂層　As-C３％、Hr-FP極少
3層　黒褐色細砂層　As-C極少
4層　暗褐色細砂層　As-C３％、焼土粒極少

Fig.10　H－296・297号住居址



H－299号住居址竈
1層　暗褐色細砂層　As-C極少、粘土粒３％
2層　褐色細砂層　As-C３％、焼土粒極少
3層　黒褐色細砂層　As-C５％、炭化物・粘土粒極少

H－302号住居址竈
1層　にぶい赤褐色細砂層　AS-C３％、焼土粒５％
2層　暗赤褐色細砂層　焼土粒20％
3層　褐灰色微砂層　炭化物、灰多量含む

H－299号住居址
1層　褐色細砂層　As-C、Hr-FP共に極少
2層　褐色細砂層　As-C２％、焼土粒２％
3層　暗褐色細砂層　As-C３％
4層　褐色細砂層　As-C５％
5層　黒褐色細砂層　As-C２％

H－302号住居址
1層　褐色細砂層　As-C10％、Hr-FP３％
2層　暗褐色細砂層　As-C５％、Hr-FP３％、焼土粒極少
3層　暗褐色細砂層　As-C３％、焼土粒２％
4層　黒褐色細砂層　As-C、焼土粒共に極少

H－313号住居址貯蔵穴
1層　暗褐色細砂層　粘土粒３％
2層　暗褐色細砂層　焼土粒、粘土粒20％
3層　黒褐色細砂層　粘土粒、灰５％
4層　黒褐色細砂層　As-Sj５％、焼土粒３％
5層　灰褐色微砂層　灰50％

Fig.11　H－299・302・313号住居址

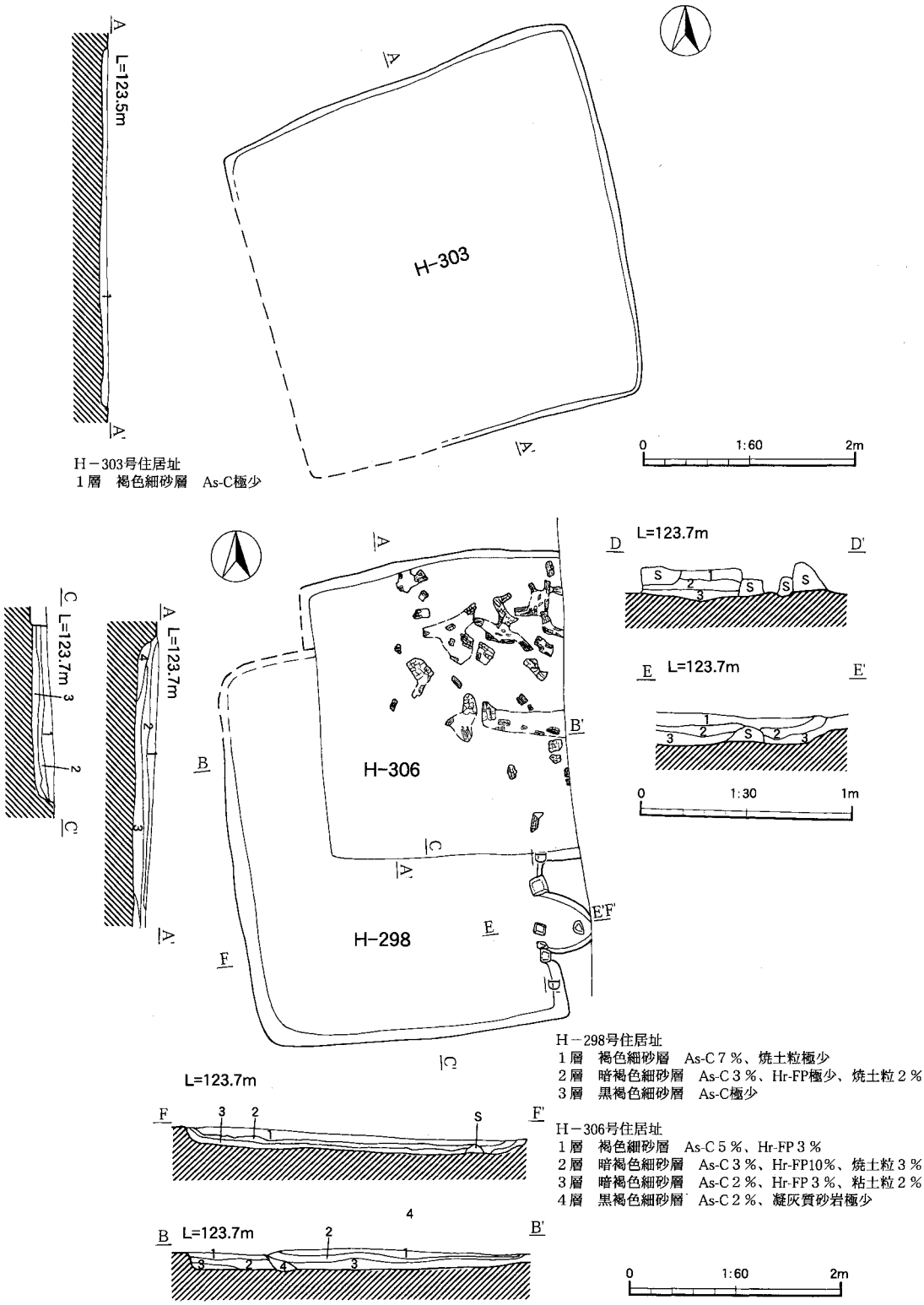


Fig.12　H—298・303・306号住居址

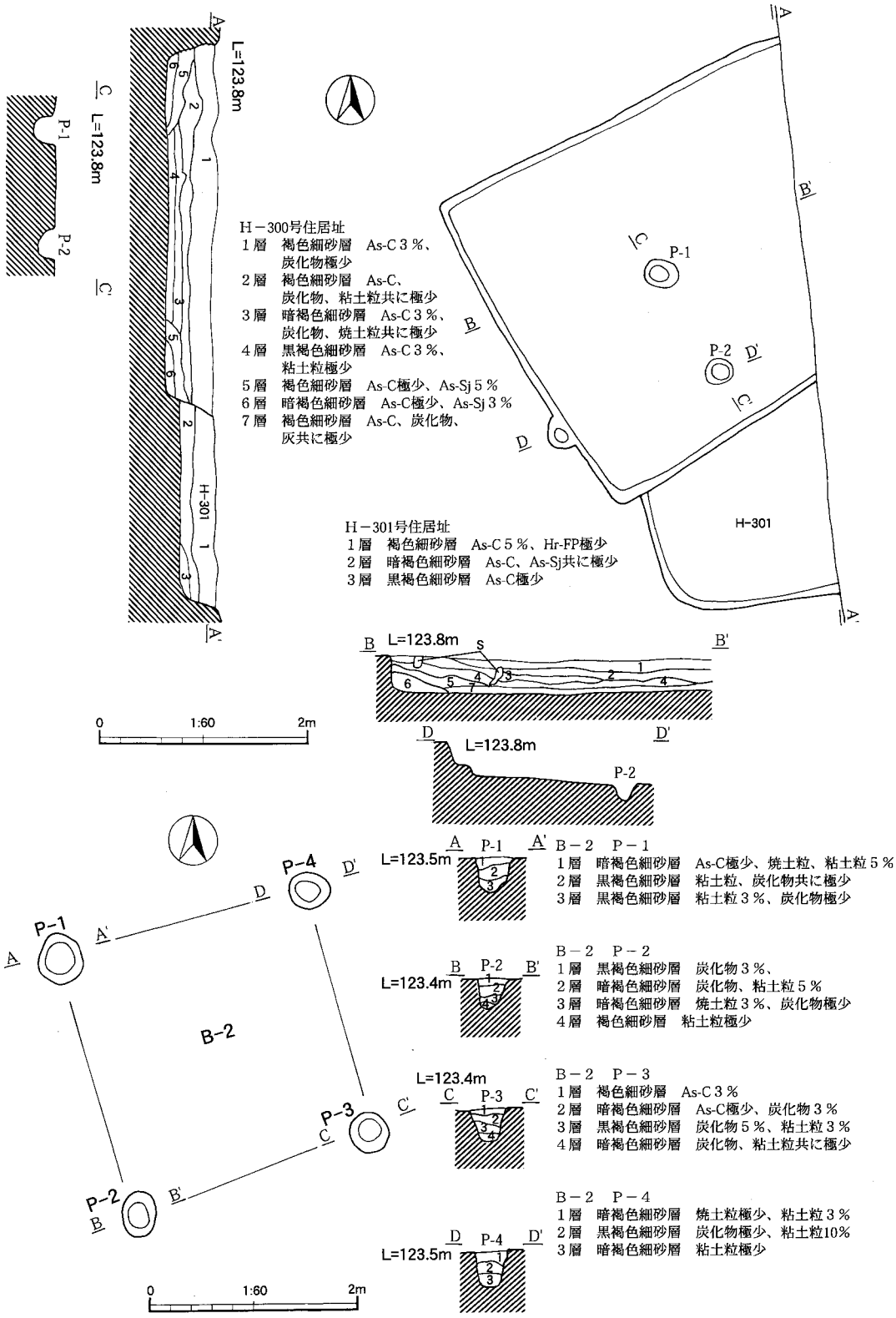
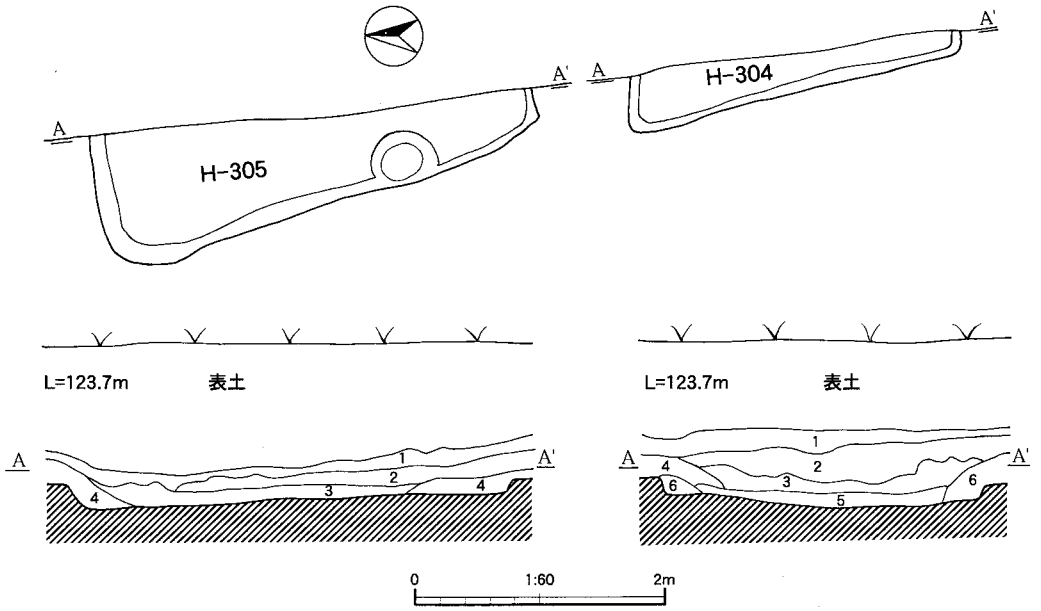
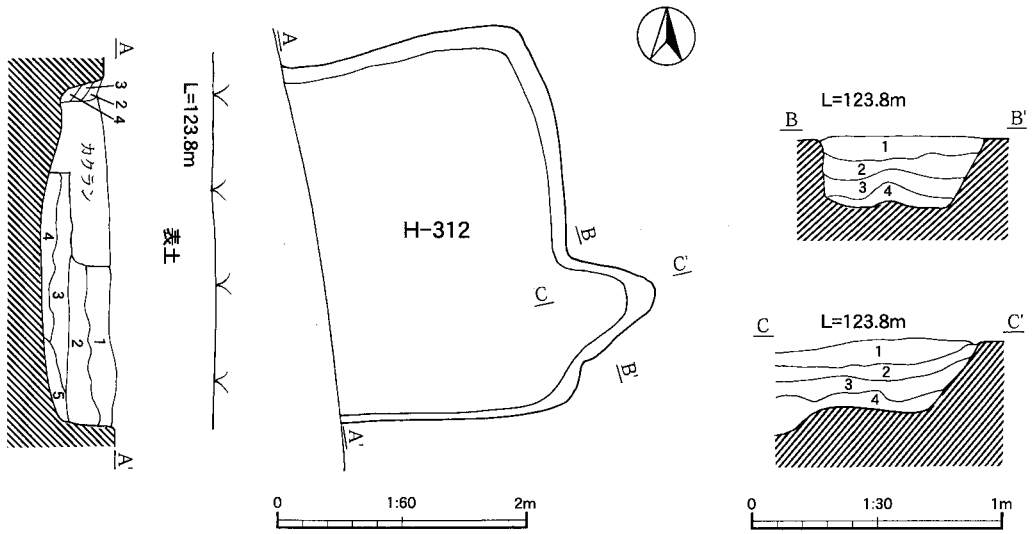


Fig.13　H－300・301号住居址，B－２号掘立柱建物址



H－305号住居址
1層　褐色細砂層　As-C３％、Hr-Fp極少
2層　暗褐色細砂層　As-C５％、焼土粒２％
3層　暗褐色細砂層　As-C極少、焼土粒、粘土粒３％
4層　灰褐色細砂層　As-C極少、As-Sj５％

H－304号住居址
1層　褐色細砂層　As-C３％
2層　褐色細砂層　As-C５％、As-Sj３％
3層　暗褐色細砂層　As-C極少
4層　灰褐色細砂層　炭化物、灰多量に含む
5層　黒褐色細砂層　As-C３％
6層　暗褐色細砂層　As-C、粘土粒共に極少



H－312号住居址
1層　褐色細砂層　As-C５％、焼土粒２％
2層　黒褐色細砂層　As-C、焼土粒共に極少
3層　暗褐色細砂層　As-C、焼土粒共に極少
4層　暗褐色細砂層　焼土粒、灰２％
5層　黒褐色細砂層　炭化物、焼土粒10％

H－312号住居址竈
1層　灰褐色細砂層　As-C15％、焼土粒２％
2層　にぶい赤褐色細砂層　As-C５％、粘土粒、灰３％
3層　暗赤褐色細砂層　As-C極少、粘土粒２％
4層　褐灰色細砂層　粘土粒20％、炭化物、焼土粒10％

Fig.14　H－304・305・312号住居址

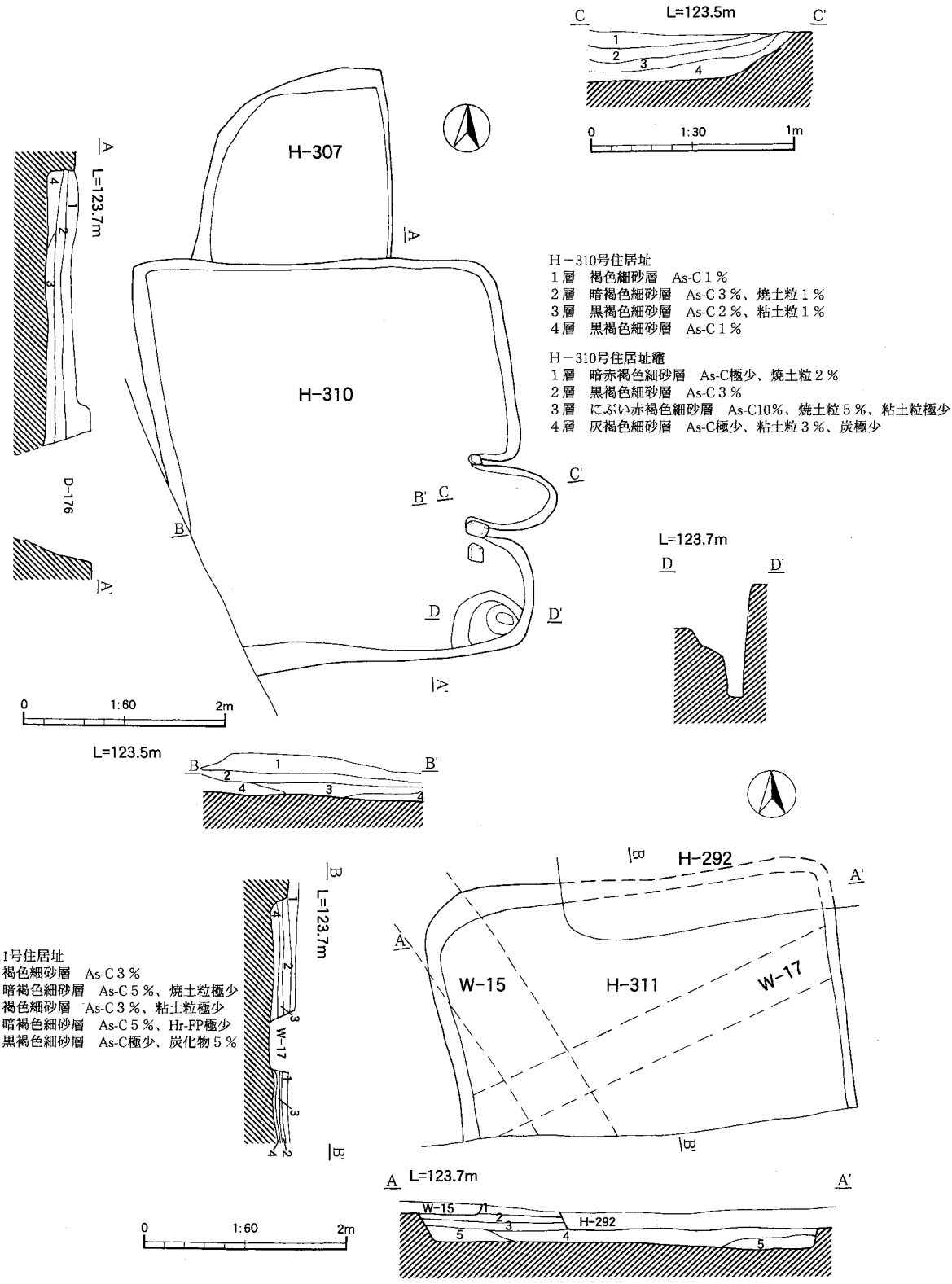
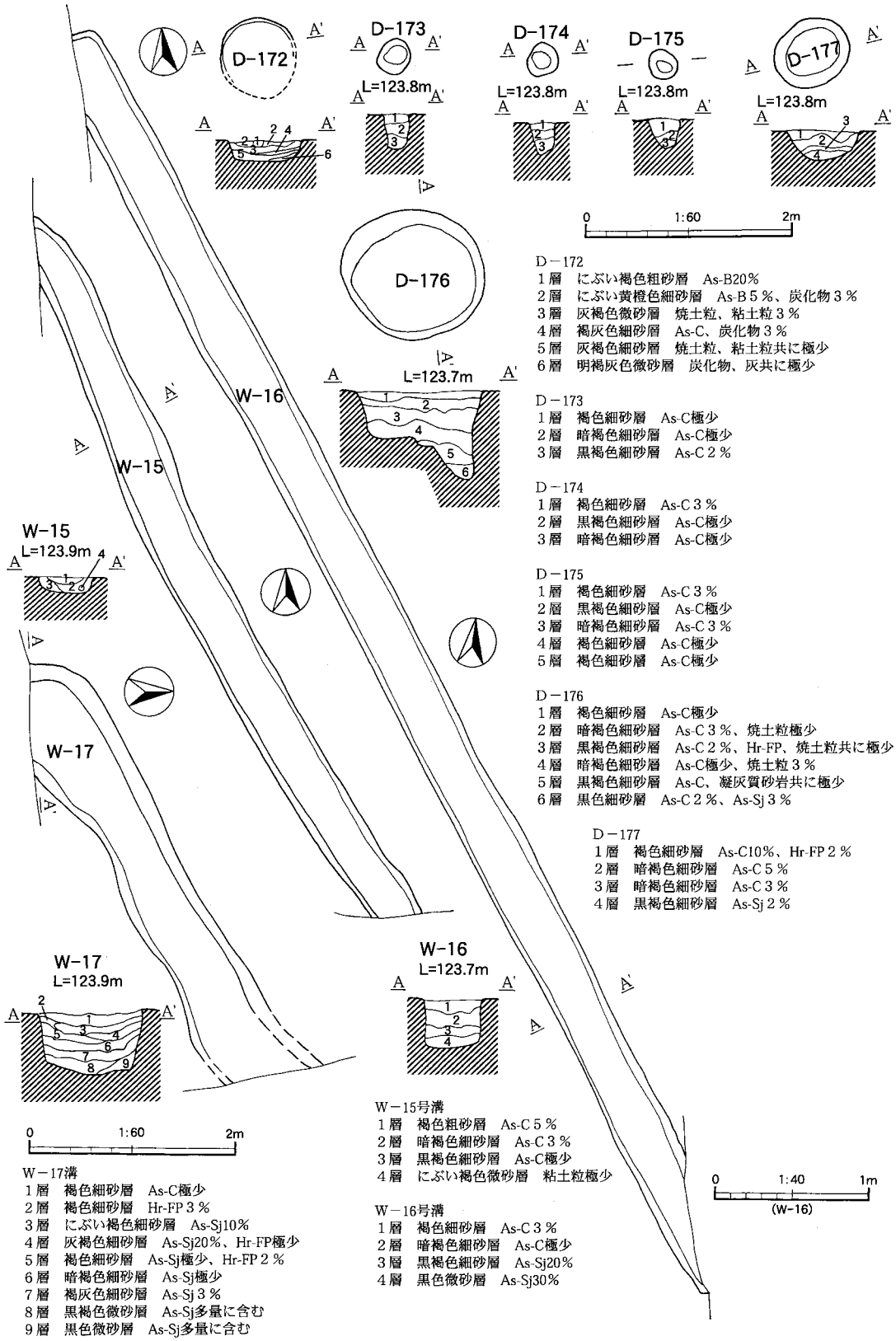


Fig.15　H—307・310・311号住居址



D－172
1層　にぶい褐色粗砂層　As-B20％
2層　にぶい黄橙色細砂層　As-B５％、炭化物３％
3層　灰褐色微砂層　焼土粒、粘土粒３％
4層　褐灰色細砂層　As-C、炭化物３％
5層　灰褐色細砂層　焼土粒、粘土粒共に極少
6層　明褐灰色微砂層　炭化物、灰共に極少

D－173
1層　褐色細砂層　As-C極少
2層　暗褐色細砂層　As-C極少
3層　黒褐色細砂層　As-C２％

D－174
1層　褐色細砂層　As-C３％
2層　黒褐色細砂層　As-C極少
3層　暗褐色細砂層　As-C極少

D－175
1層　褐色細砂層　As-C３％
2層　黒褐色細砂層　As-C極少
3層　暗褐色細砂層　As-C３％
4層　褐色細砂層　As-C極少
5層　褐色細砂層　As-C極少

D－176
1層　褐色細砂層　As-C極少
2層　暗褐色細砂層　As-C３％、焼土粒極少
3層　黒褐色細砂層　As-C２％、Hr-FP、焼土粒共に極少
4層　暗褐色細砂層　As-C極少、焼土粒３％
5層　黒褐色細砂層　As-C、凝灰質砂岩共に極少
6層　黒色細砂層　As-C２％、As-Sj３％

D－177
1層　褐色細砂層　As-C10％、Hr-FP２％
2層　暗褐色細砂層　As-C５％
3層　暗褐色細砂層　As-C３％
4層　黒褐色細砂層　As-Sj２％

W－17溝
1層　褐色細砂層　As-C極少
2層　褐色細砂層　Hr-FP３％
3層　にぶい褐色細砂層　As-Sj10％
4層　灰褐色細砂層　As-Sj20％、Hr-FP極少
5層　褐色細砂層　As-Sj極少、Hr-FP２％
6層　暗褐色細砂層　As-Sj極少
7層　褐灰色細砂層　As-Sj３％
8層　黒褐色微砂層　As-Sj多量に含む
9層　黒色微砂層　As-Sj多量に含む

W－15号溝
1層　褐色粗砂層　As-C５％
2層　暗褐色細砂層　As-C３％
3層　黒褐色細砂層　As-C極少
4層　にぶい褐色微砂層　粘土粒極少

W－16号溝
1層　褐色細砂層　As-C３％
2層　暗褐色細砂層　As-C極少
3層　黒褐色細砂層　As-Sj20％
4層　黒色微砂層　As-Sj30％

Fig.16　W－15～17号溝，D－172～177号土坑

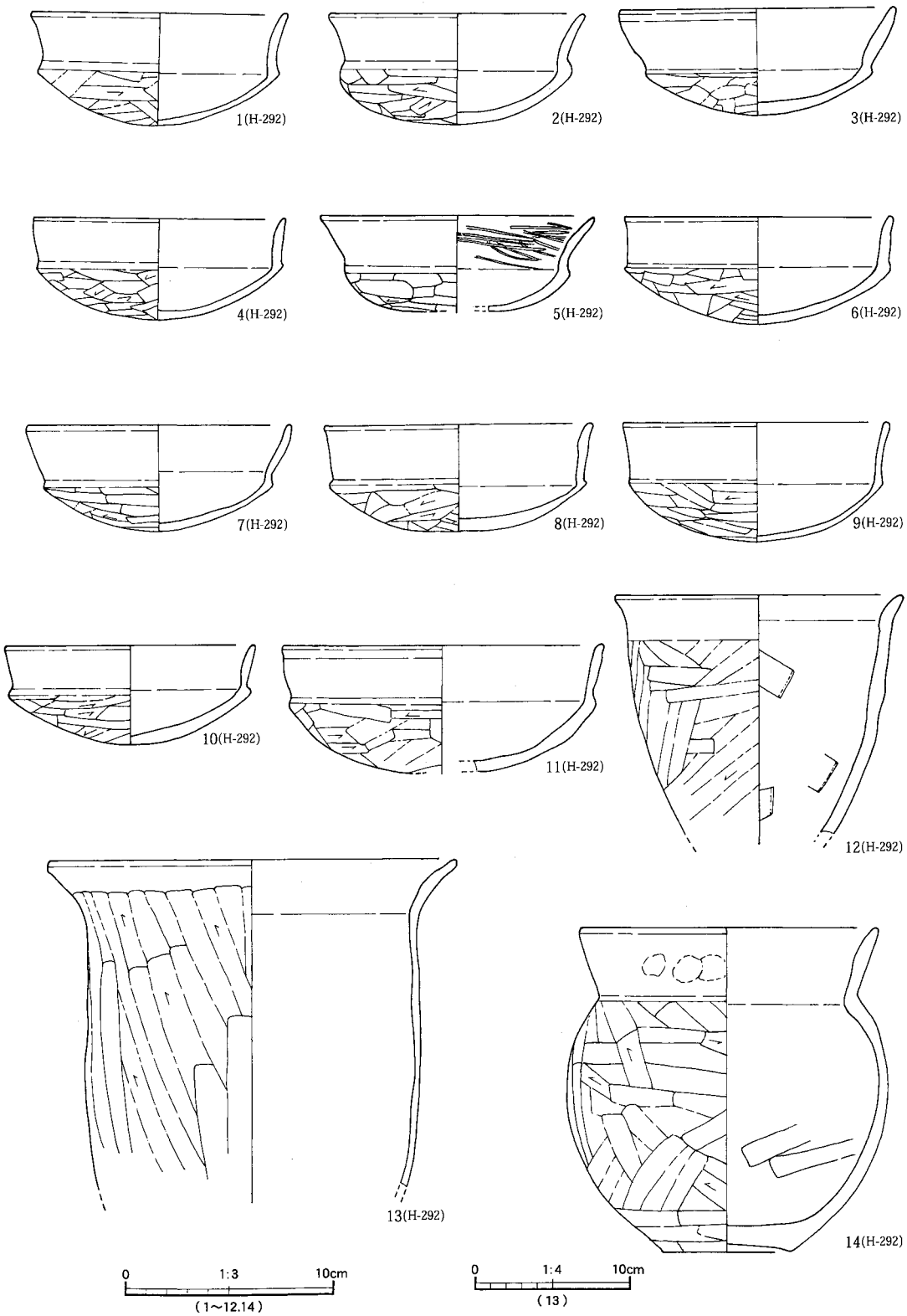


Fig.17　H－292号住居址出土の土器

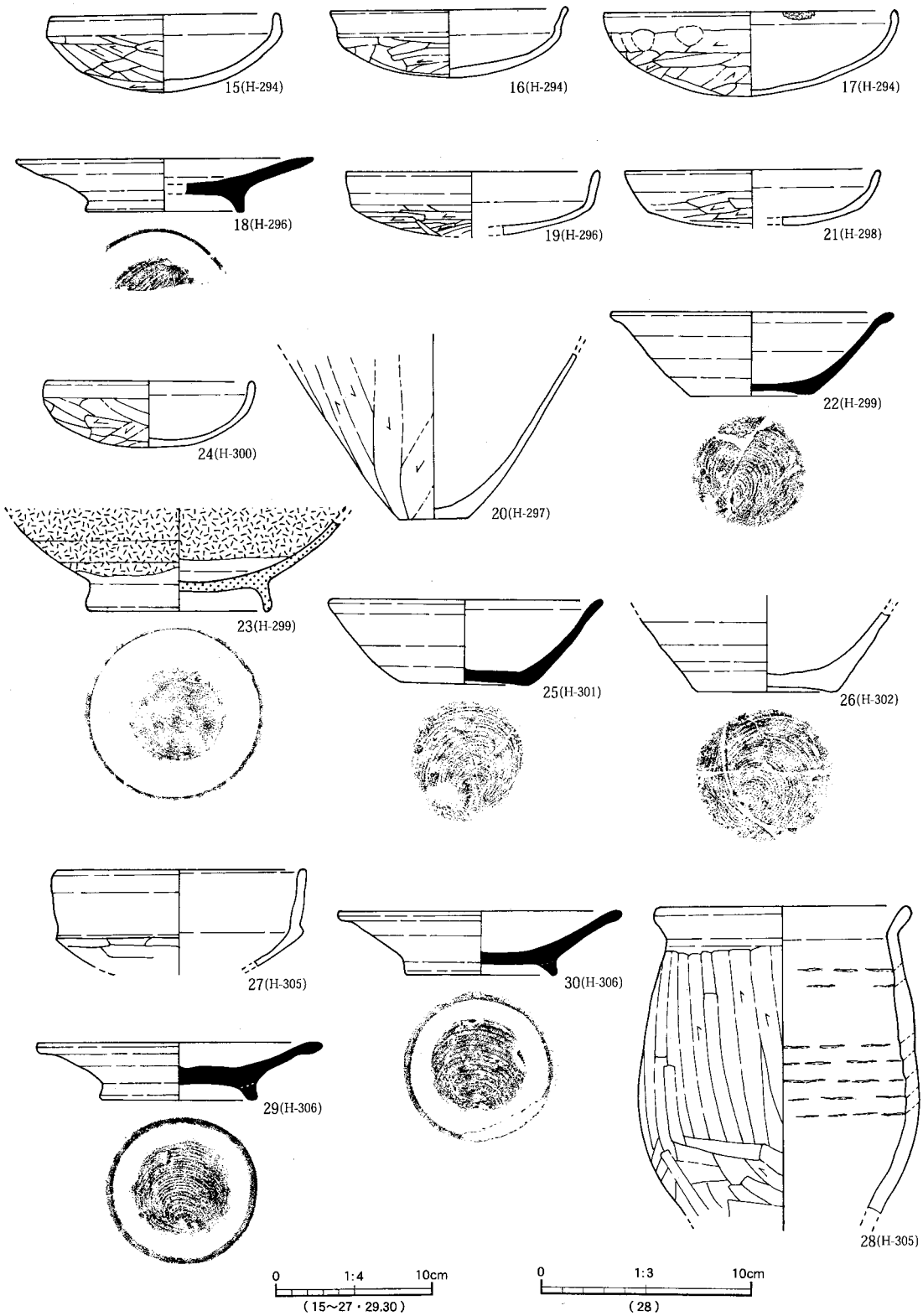


Fig.18　H—294・296～306号住居址出土の土器

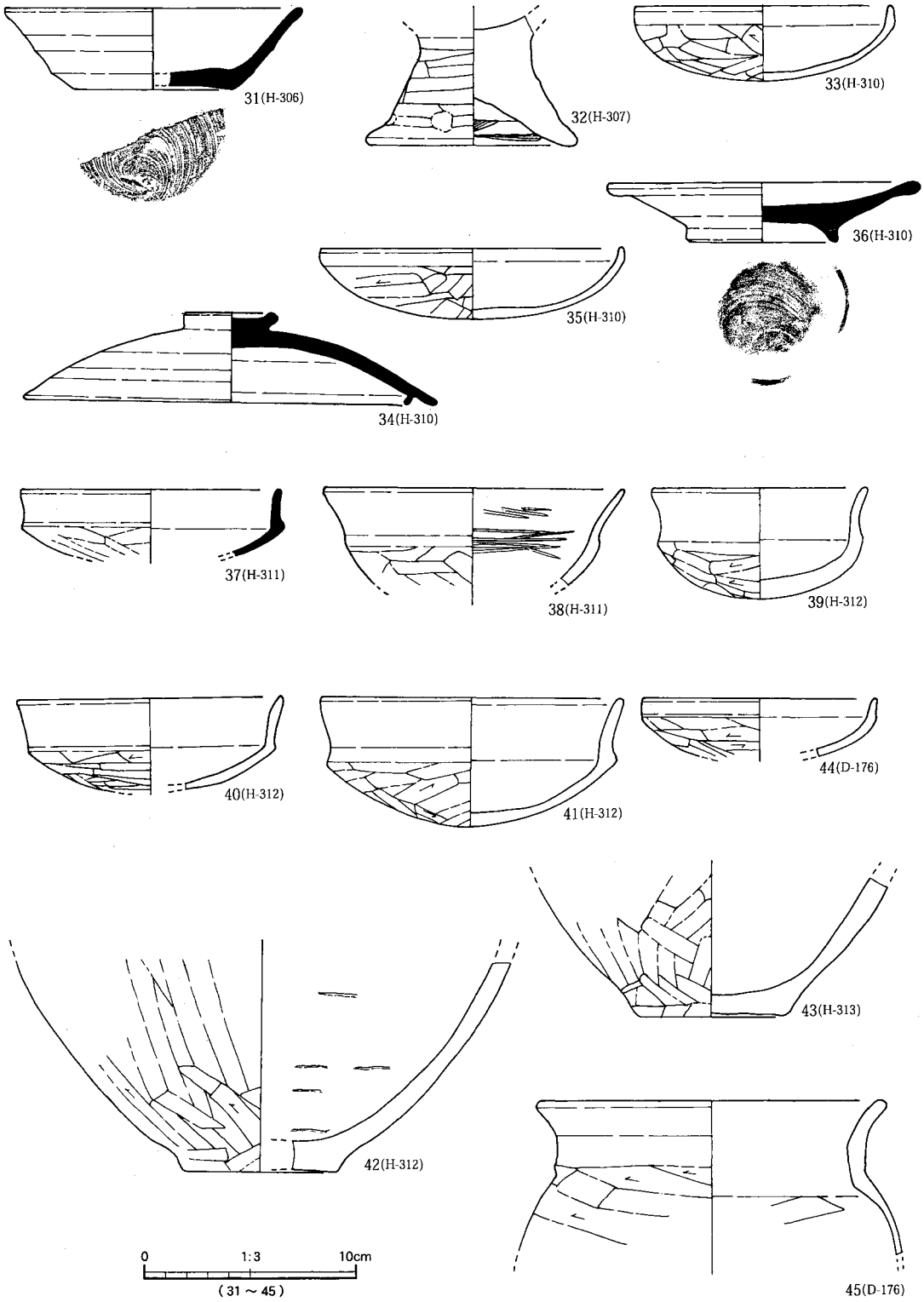


Fig.19　H—306・307・310～313号住居址，D—176号土坑出土の土器

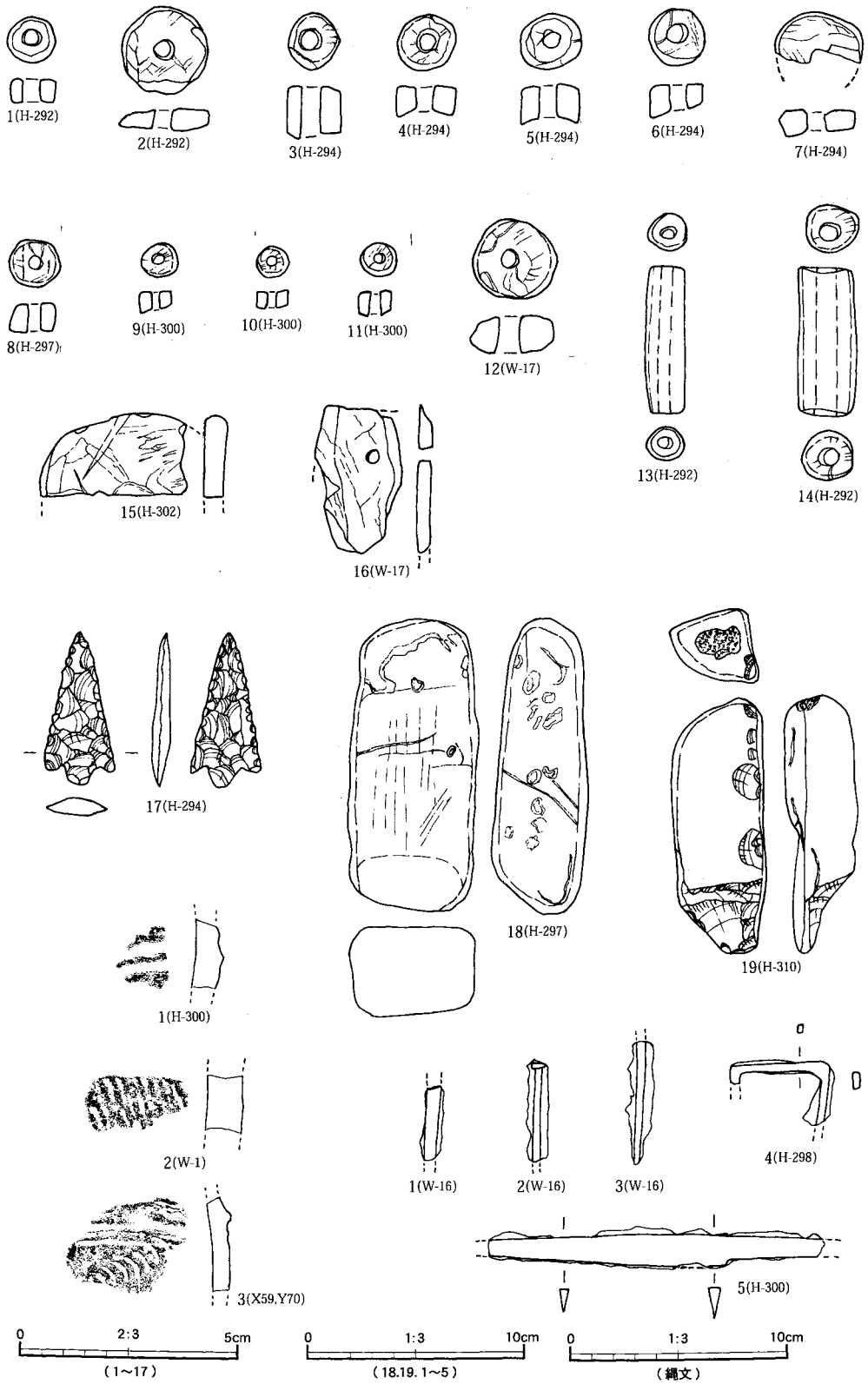
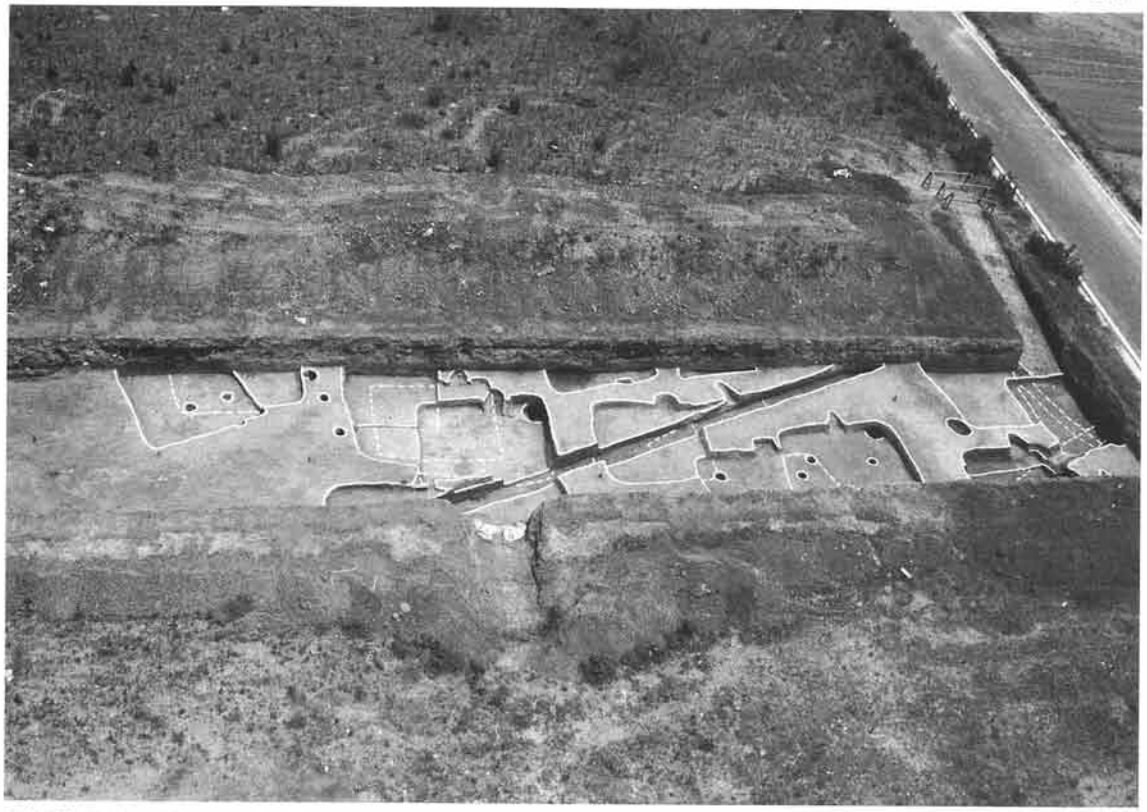


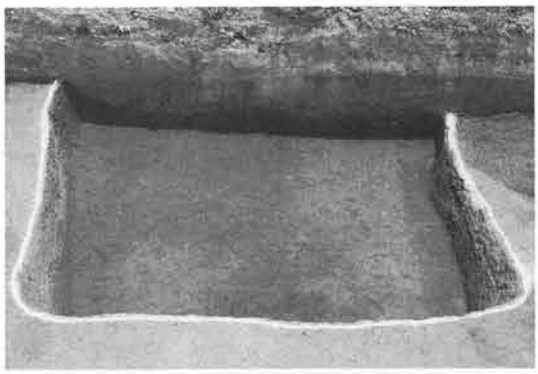
Fig.20　H—292・294・297・300・310号住居址，W—16・17溝，グリッド出土の土器・石製品・縄文・鉄製品



調査区全景（西から）

調査区全景（南から）

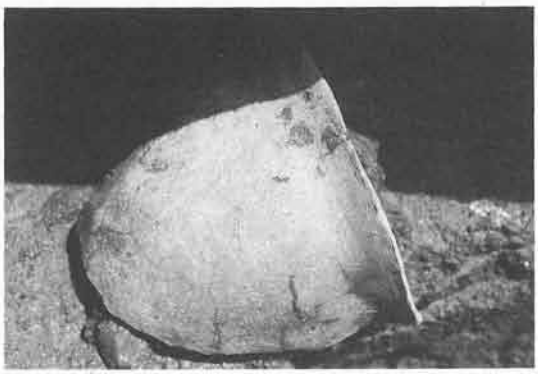
調査前の大屋敷遺跡（南から）



H－292号住居址（西から）

H－292号住居址遺物出土状態（西から）

H－292号住居址遺物出土状態（北から）

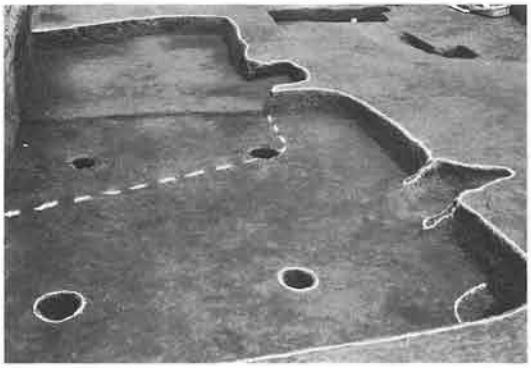


H－292号住居址遺物出土状態（西から）

H－292号住居址遺物出土状態（南から）

W－15号溝（南から）

H－292号住居址遺物出土状態（北から）



H－294・296号住居址（南東から）

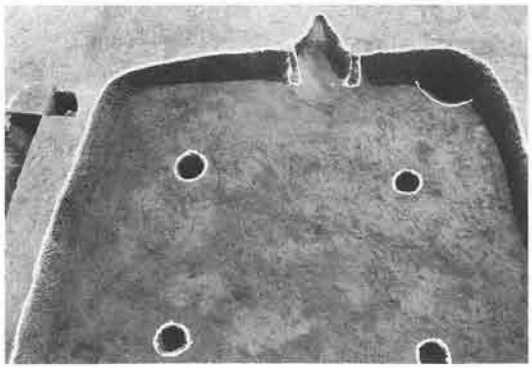
H－294号住居址遺物出土状態（南から）

H－294号住居址遺物出土状態（南から）

H－295号住居址竈（西から）

H－294号住居址遺物出土状態（北から）

H－294号住居址遺物出土状態（北から）



H－294号住居址（西から）

H－294号住居址竈（西から）

H－297号住居址（西から）

H－297号住居址遺物出土状態（西から）

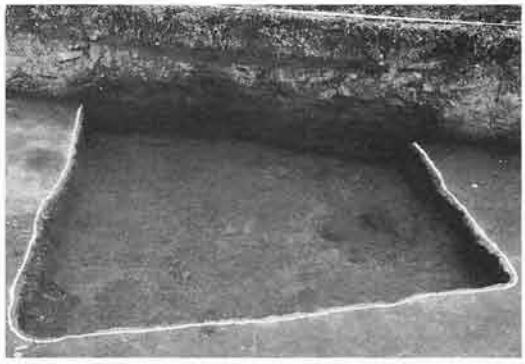
調査区南側全景（北から）

H－299号住居址竈（西から）

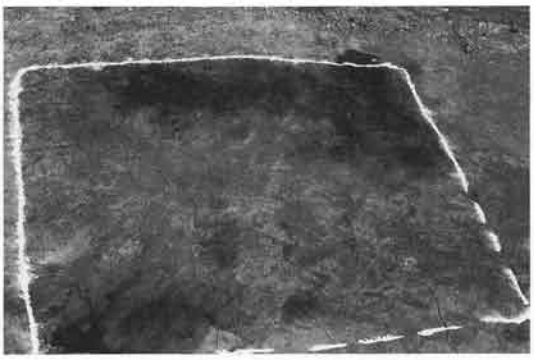
H－300・301号住居址（北から）

H－299号住居址遺物出土状態（南から）

H－300号住居址遺物出土状態（南から）



H－300号住居址（西から）

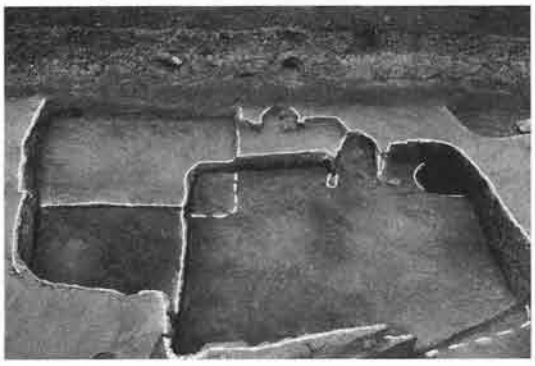


H－303号住居址（東から）

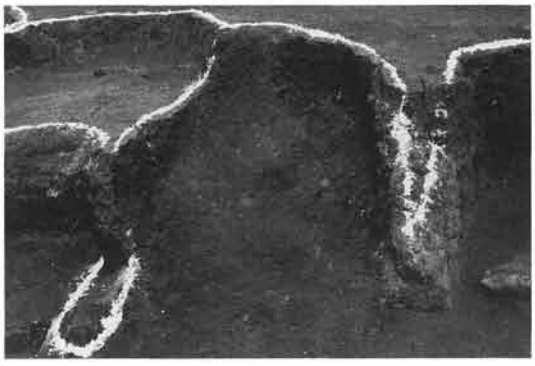
H－305号住居址遺物出土状態（北から）

D－173・174・175号土坑（南から）

H－302号住居址遺物出土状態（南から）



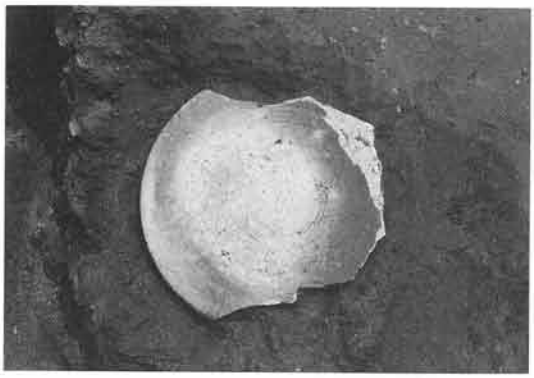
H－298・306・307・310号住居址（西から）



H－310号住居址竈（西から）

D－176号土坑（西から）

H－310号住居址遺物出土状態（東から）



H－310号住居址遺物出土状態（西から）

H－307号住居址遺物出土状態（南から）

H－310号住居址遺物出土状態（東から）

H－310号住居址遺物出土状態（西から）

H－298・306号住居址（南西から）

H－306号住居址（西から）

H－306号住居址土屋根（南から）

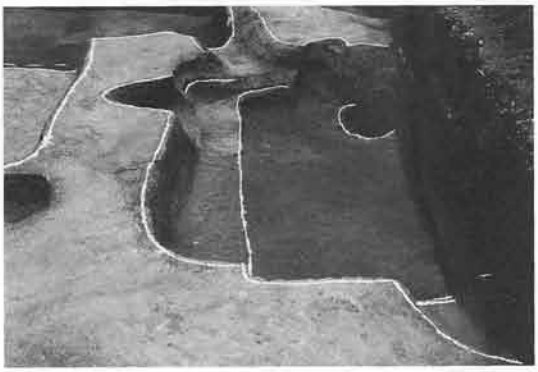
H－306号住居址土屋根（北から）

H－306号住居址遺物出土状態（西から）

B－２号堀立柱建物址（東から）

H－312号住居址（西から）

H－312号住居址竈（西から）



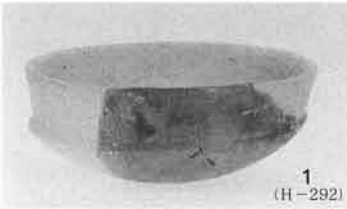
H－312・313号住居址（北から）

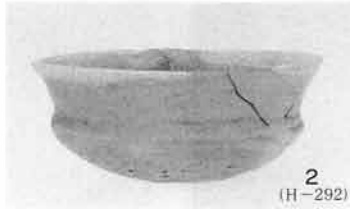
H－312号住居址遺物出土状態（南から）

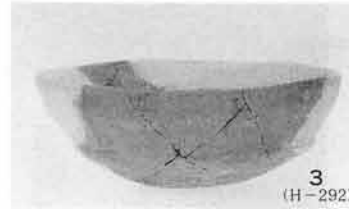
H－292・311号住居址（西から）

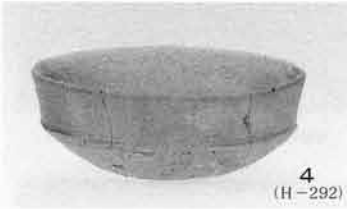
W－17号溝（東から）

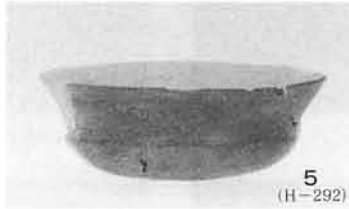
PL8

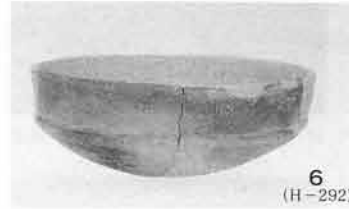

1
(H－292)

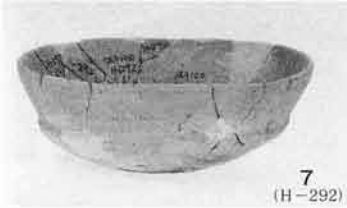

2
(H－292)

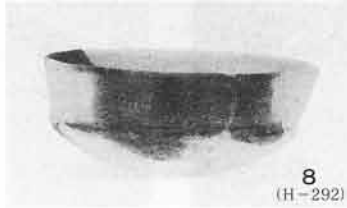

3
(H－292)

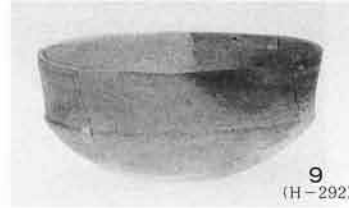

4
(H－292)


5
(H－292)


6
(H－292)


7
(H－292)


8
(H－292)


9
(H－292)

10
(H－292)

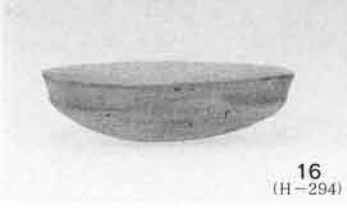
11
(H－292)

12
(H－292)

13
(H－292)

14
(H－292)

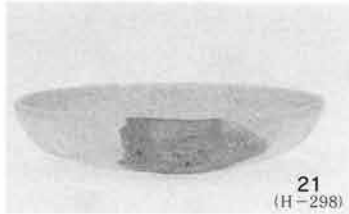
15
(H－294)


16
(H－294)

17
(H－294)

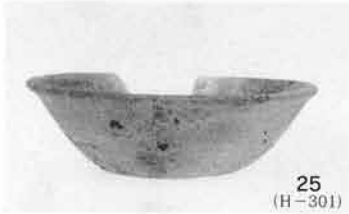
18
(H－296)

19
(H－296)


21
(H－298)

22
(H－299)

24
(H－300)

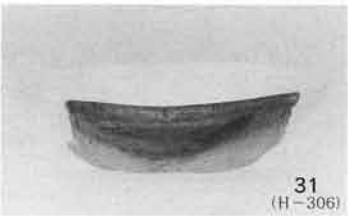

25
(H－301)

29
(H－306)

27
(H－305)

28
(H－305)

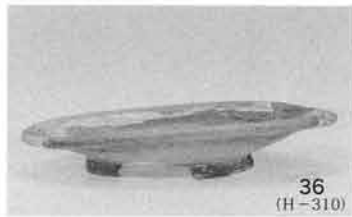
30
(H－306)

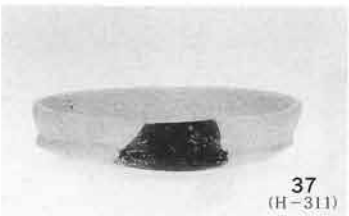

31
(H－306)

33
(H－310)

34
(H－310)

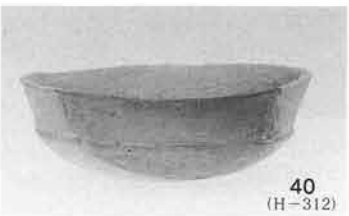
35
(H－310)

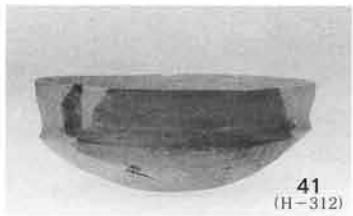

36
(H－310)

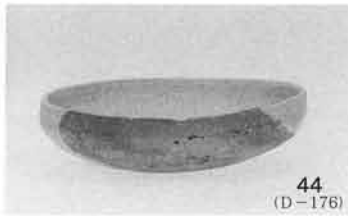

37
(H－311)

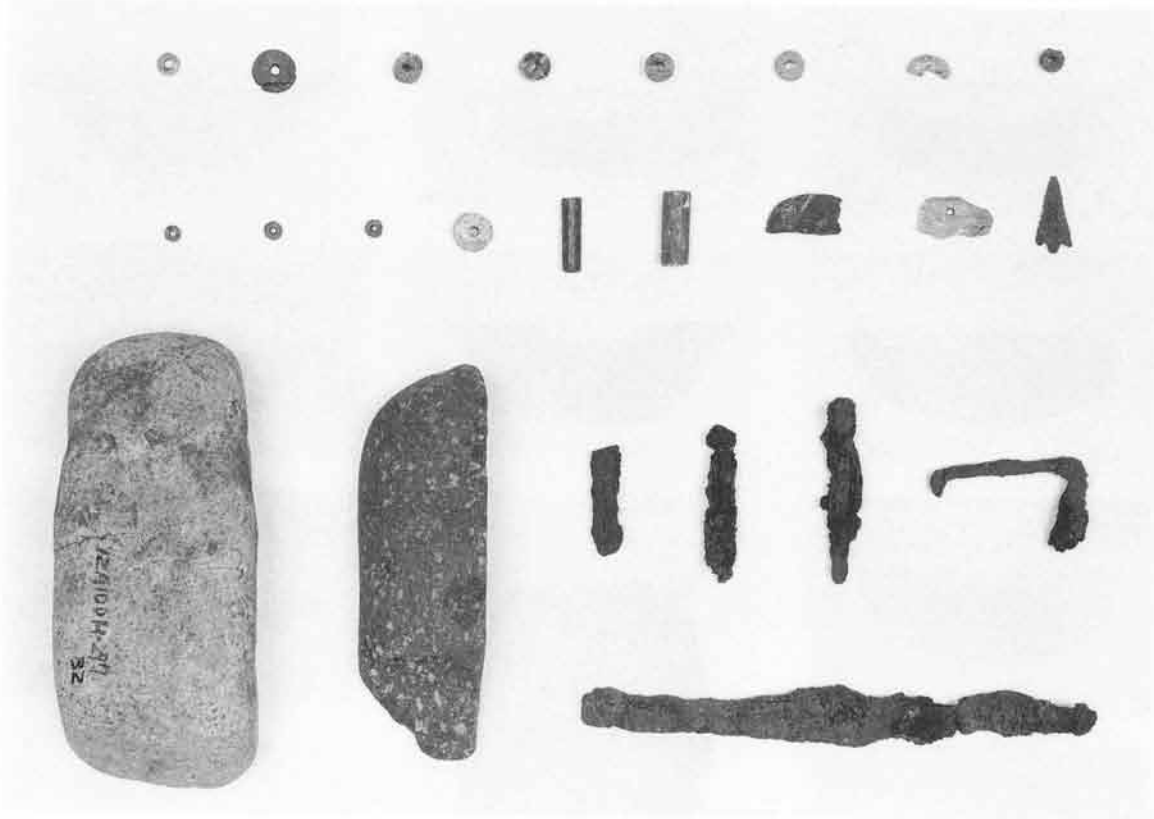
38
(H－311)

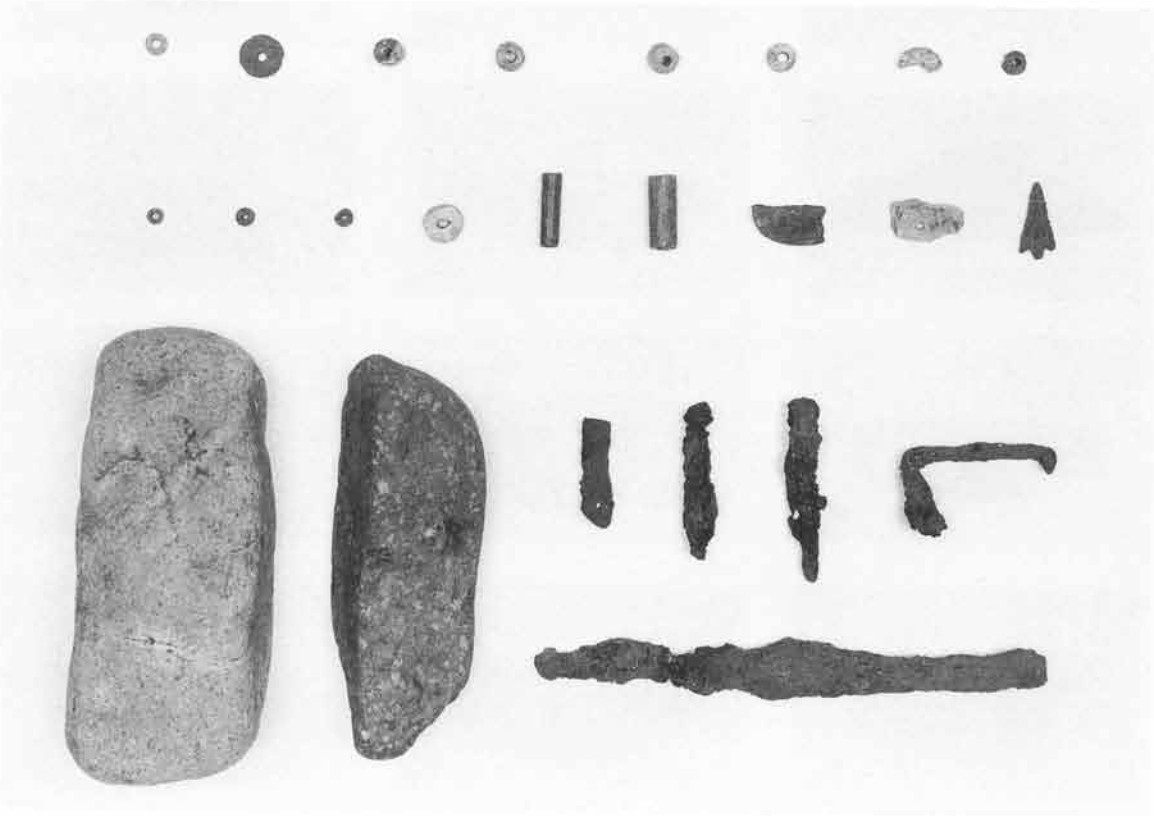
39
(H－312)


40
(H－312)


41
(H－312)


44
(D－176)





白玉・管玉・剣形品・石鏃・叩石・鉄器

抄　　録

フリガナ	オオヤシキイセキロク
書名	大屋敷遺跡VI
副書名	宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	オオヤシキイセキ
シリーズ番号	6
編著者名	鈴木雅浩　　髙橋一彦
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371-0018　群馬県前橋市三俣町二丁目10-2
発行年月日	西暦2001年3月23日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
オオヤシキ 大屋敷遺跡VI	マエバシシソウジャマチ 前橋市総社町	10201	12A100	36°24′00″	139°02′25″	20000424 ～ 20000623	536m²	宅地造成事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
大屋敷遺跡VI	集落跡	古墳時代 ～平安	竪穴住居址22軒、溝3条、 掘立柱建物址1軒、土坑6基	縄文土器、土師器、須恵器、鉄器、石器、石製品、特殊遺物
特記事項	祭祀に係わりのある住居址（石製模造品多数出土） 土屋根（住居址より出土）			

大屋敷遺跡VI

平成13年3月16日　印　刷
平成13年3月28日　発　行

編集発行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市上泉町664―4
TEL　0272―31―9531

印　刷　朝日印刷工業株式会社